

NO. 51
AUTUMN
1975

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：英語教育の
現状と改革の方向(4)

(鼎談) 朱牟田夏雄・太田朗・平野敬一

インタビュー：日本人と英語

三木武夫・國弘正雄



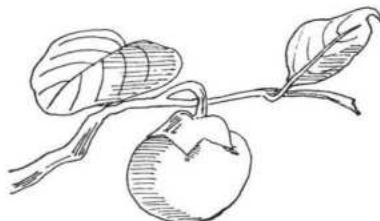
英語展望

NO. 51
AUTUMN
1975

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【インタビュー】

- 日本人と英語 三木武夫・國弘正雄 2

【国際展望】

- 成熟期を迎えた日米関係 國弘正雄 5
差別用語追放運動をめぐって 筑紫哲也 8
On Studying Japanese Politics Daniel I. Okimoto 10

【特集】 英語教育の現状と改革の方向 (4)

- 鼎談：英語教育改善策を探る 朱牟田夏雄・太田朗・平野敬一 12
中学校及び高等学校における英語教育の改善について 20
ルサンティマンの壁のなかから 田村 泉 21
基礎語彙について(5) 服部四郎 26
バラッドの世界 (その3) 平野敬一 35
Challenge and Response 平野敬一・小林祐子 40
「国際英語」と「国内英語」／英語の「敬語」と社会慣習／
ていねいさとイントネーションの関係

【新刊書評】

- 『身ぶり言語の日英比較』 中野道雄 44
Improving Oral English Through
Choral Speaking Harvey M. Taylor 45
新刊紹介 47
新刊案内 49
Crossword Puzzle C. V. Harrington 50
展望通信 51

表紙デザイン

太田 英男

【インタビュー】

日本人と英語



外国語学習の必要性

國弘 本誌は中学校、高等学校それから大学の先生方を対象にした雑誌ですから、できたら先生には、「日本の外国語教育」ということと「私と英語」ということについて、自由にお話をいただきたいと思います。

それに先だってまず申し上げたいのは、今回の訪米が大成功であったことを私共大変に喜んでおりますし、先生も非常にご満足だと思います。レストラン大記者が*New York Times*で“Hiroshima Plus Thirty”という感動的な論文を書いて今回の三木訪米が今迄に例をみないほどの大成功であったということをたたえている位ですし、私共もうれしいけれども先生のご満足がどの程度のものであるかということはお察しできるわけです。

結局先生が大変な説得力をもって説かれたことが一つの大きな理由だったと思いますが、同時にアメリカ自身冷戦構造から解放されて、もう少し落ち着いて国際情勢、アジア情勢をみれるようになった。そしてその冷戦構造から解放されただけに、先生が今迄につみ重ねてこられた実績を改めてアメリカが評価しなおしたという面があったと思います。

とくに1939年、昭和14年ですか、まだ32歳で1年生代議士でしかなかった先生が、敢然として日米戦うべからず、という平和運動を展開された。すでに軍部が日本を事実上支配して、言論や思想の自由も大幅に抑圧されていたわけですから、戦争か平和かの二者択一を迫られ、ときの軍部に楯ついてまで、非戦を唱えるのには大へんな勇気と信念がいったと思うのです。ああいう時代は二度と再びもたらしちゃいけないし、先生も同様の決意をおもちだと思うのですが、正直いって私に同じことができたか、というとあんまり自信がない。今まで私がささやかな声をたててきたのも、そうなってからでは遅すぎるし、自分はあるいは貝のように沈黙してしまうのではないか、という怖れがあるからなのです。

その意味において、やはり、しゃせん外交というも

(ゲスト) 三木 武夫 (内閣総理大臣)
國 弘 正 雄 (国際商科大学教授)

の、あるいは人間関係というものは単に言葉の問題ではないので、いかなる実績のつみ重ねがあったかということが、最も雄弁な、事実の証人であるとは思うのですが、それはそれとして、この雑誌の性格上「日本人と英語」ということでお話しいただきたいと思います。

三木 言葉のもつ重要さは、単に言葉というものが、技術という、単に日本語を英語になおす、日本語の考え方を英語の考え方になおすという、技術以上のものがある点にこそ見出されると思う。だから、私は語学というのは単なる技術以上のものだと思うのです。やはりもっと深い意味があるというふうに考えます。

それは何かというと、一つの言葉は永い歴史や伝統を背負っていますし、その民族や国民の感情も反映しているわけです。ですから私は単に通訳を使えばいいじゃないかというふうには考えないです。やはり自分が外国語というものをマスターして、英語なら英語で相手の感情なり意見を受けとめるようにしないと、通訳を介在するのでは向こうの感じというものを十分に受けとるわけにはいかない。

そういう意味からして、語学の持つ意義というものを単なる言葉の媒介をする技術だと私は思わない。もう少し深い意味があるとみなすものですから、どうしても、外国語を勉強してそれがわかってこないと、なかなか向こうの感情をじかに、身にしみて受けとることはできない、と思うのです。

もちろん、だいたいの意味は通訳をつければわかりますよ。でも意味だけないものが語学の背景にはある。だから今日のように世界が狭くなってくると——エスペラントのようなものが一時いわれたけれども、ああいう人造的な言語は人間の言葉としての普遍性と深みと持っていない——英語とかフランス語とかいうようなものが、国際語としての通用性を持ってくる。

ことに一番普遍性を持って来たのは何といっても英語だと思うので、これにはアメリカの国力が背景にあったことも事実でしょうが、そういうことで外国語のなかで一番普遍性を持っている英語というものを勉強する必要

があった。

また英語をマスターすると、同じようなインド・ヨーロッパ系に属する、他の外国語を勉強しても日本語からじかに入るのと違って比較的容易だというメリットもある。まあそういう意味から、これからの方はどうしても外国语の一つぐらいはマスターしないとどうにもならない。日本語が世界語になればいいが、とてもそうはいきません。しかも日本ぐらい、世界各国の人とのかかわりにその運命をかけた国は、そう沢山ありません。それにはやはり言葉が欠かせない。

そこで語学の勉強というものは、どうしても若いときからやらねばいけない。年をとってからの語学の勉強は、色々な意味で困難がともなう。ただ語学といって国際社会で自由自在に討論のできる位にならないとね。単に日常の用を足す位のことはだれでもできるわけだから、色々な会議の場で英語で自由に討論出来る位の語学力と見識・知識とを、若者は持つ必要がある。それには若い時から勉強しなければならない。

語学ほど根気のいるものはない。それはもう、努力する者にはかなわない。先天的に語学的な才能を持っている者と、持っていない者の差というものは、色々の他の場合よりは顕著にあると思うけれど、やはり努力すればある程度カバーできるものがある。

ことに英語の場合は、英語としての一つの骨組みがある。それを完全にマスターしてしまえば、英語で討論する場合、多少 pronunciation の handicap があっても、向こうに理解されるような英語になる。最近の若い人達はどうも根気をつめて語学をやるという精神が少なくなってきた。外の政治活動なんかに興味は持つけれども、政治活動は、卒業してからでもできるわけだ。学校を卒業してしまえば、語学というものを根をつめて勉強することは時間的にも気力の面からいってもなかなかむつかしい。いわゆる政治運動に興味のある人は卒業してからやつたらいいんで、学校にいる間は語学の勉強に一番めぐまれた環境にいるんだから、そこで根をつめて勉強することが大切だと思います。

外国語教育の問題点

三木 日本の語学教育というもので今一つ問題だと思うのは、現在外国語教育のための色々な機械、いわゆる



三木総理大臣（左）、園弘正雄先生（右）

視聴覚器具を使っての技術的な面の進歩もあるのだが、学校の先生自身が皆、外人と見劣りのしない発音を身につけることは不可能なことなんだから、英語の骨組みを学校教育で教えて、pronunciation はいまいった視聴覚器具の新しい開発が行なわれているから、そういったもので補う。

つまり私はね、学校の英語教育で一番大切なことは、英語の骨組み、つまりは骨格を教えることだと思う。文章の構造というか、基本的な syntax というか、それをしっかりと教えていただきたい。骨太な英語といってもよいかもしれない。それさえきちんと身についていたら、あとは専門の知識が磨かれるにつれて、血や肉はいくらでも補強することができる。また骨太な骨格さえできていれば、少々発音が日本人的でも、相手と堂々とやりあうことができる。でも肝心の骨組みがきしゃだと、一見、流ちょうで外人の英語みたいに聞こえても、本当はうんとひよわで、何かがあったらすぐ骨折をおこしたりして、もろさが露呈される。これでは困る、と思うんですよ。だから学校時代、とくに初步の英語教育ではうんと骨太な英語の基礎づくりを心がけて欲しい、って要望するんです。

いま一つ、これは問題発言かもしれませんのがね、人間の才能っていうのは千差万別だ、というのが私の考え方なんです。だからたとえば入学試験なんかの際にも、能力判定の基準ができるだけ多様化して、とにかく何かの能力が潜在的にでも頗在的にでもある場合には入学できるようにならないといけない。いまのやり方はあまりにも一律にすぎるのではないか。現代という時代は、多様な能力が求められるわけですからね。何でも万能なくこなせるソフのなさも能力なら、片よってはいるが何か

一つ二つのことには群を抜いているというのも能力だし、学問は一寸お留守だけど、人をリードする、人を集め一つのことを成し遂げていくというのも立派な能力でしょ。また、学力テストはよくなくても、心理テストとかIQとかがズバズバ高い、という潜在的能力もある。要は人間っていうのは一様じゃないんで、そこに画一的な能力判定基準をもってみると、どうしても貴重な人材が選ばれてしまう。それでは日本全体にとってマイナスだけど、その個人にとってはとりかえしのつかない不幸なことになる。これはいけない。創造力のある子どもの芽が却てつみとられることになりかねないからです。

語学についてもある程度まで同じことがいえやすまいから、って思うんです。

語学というものに興味を持たないで、他に才能を持っている人もあるわけだから、いやでしゃうがない人が語学をやるということは非能率のことでもあるから、必ずしも一律なものでなくとも良いのではないか。

学校においても、語学を非常に大事にする学校、あるいはクラスでも、皆一律になると、どうしても才能に恵まれてない人に合わせる結果になる。上達する才能を持っている、あるいは熱意を持っている人が、才能をのばし得ないような、今迄の一律のものと旧態以然たる語学教育のあり方を変える必要がある。

國弘 よく判りました。とくに教育全体、入学試験のあり方というか、その基本的な考え方、なかんづく能力判定の基準が、あまりにも一律的でありすぎる、というのは重要なご指摘だと思います。ワシントンの記者クラブでの演説でも、国際関係における多様性の尊重ということを力説されただけに、若い子どもの一生を大きく左右する入試に関しては、判定基準をもっと多様化しては、というご指摘、なるほどと首肯されます。たしかに現行のやり方だと、ソツのないというか、万遍なく何でもひととおりはこなしてみせる子供だけが、不当に高く評価されている、というきらいがありますからね。でもヘンバな能力というのも現にあるわけですし、その能力も日本は必要としている。ところがそういう能力はえていてpunishされrewardされていない。一方、学力、それもペーパーテスト的な受身の能力だけが異常なまでに高くrewardされている。これでは真に創造的能力は育たないどころかむしろ芽をつみとられかねない。おっしゃるように、その個人にとっては最大の不幸ですね。日本の数学は、与えられた問題の解法をみつけ出すことでは世界一流だが、新しい問題を創り出すことではぐんと落ちる、という話を、ある世界的な数学者か

ら伺ったことがあります、この辺とも関連があるかもしれません。

三木総理と外国語

國弘 ところが今回、キッシンジャー長官や色々な人から、三木さんの英語は非常にいいではないかといわれたようですね。キッシンジャー長官のごときは自分自身が強いドイツなまりを持っているものですから、先生の徳島なまりの英語を大変に評価していたということをきました。何回か英語でご発言になるような場があったように思うのですが、その辺に関連して「私と英語」というようなことをお話しいただけたらと思います。

特に昔オーストラリアのカンベラの国立大学でかなり長い英語の演説をなさった、それから8年ほど前でしたか、南カリフォルニア大学で法学博士号をおとりになつたときにも、「太平洋時代の光と影」というこれまた歴史に残る演説を英語でおやりになつた。今回はまあそういう演説は英語で直接はおやりにならなかつたけれども、英語でのご発言はいくつかあちこちでなさっているわけです! その辺もお入れいただいて、先生の「英語と私」みたいなことを、一寸お話しいただけたらと思います。

三木 私自身も、こんなに世界が狭くなるというふうには考えなかつた。なにしろずい分古い時代の学生ですから、語学というものの必要さというものをまだ幼い時には感じなかつた。そして英語の勉強というものに非常に重要度を置いたわけではなかつたが、その後だんだんとそれを必要とする社会に入ってきて、これはしまつたと思うけれど、今になってはなかなかとりかえすこともできない。

だから学校の先生にもお願いしたいのは、自分の英語というものが、必ずしも外国で通用しにくい、特に発音の点についてはけんきょに新しい技術を取り入れて、そして自分の足りないところを補っていくことと、若い学生たちに対して語学は学生時代にやれと、やらないとなかなか卒業してからではむずかしい、だから色々とやりたいことはあるだろうが、ある程度その時間を犠牲にして語学をやってないと自分の人生の幅がちがつて来るという点を教えて、語学教育の重要性を説いてもらいたい、そういうことを望みたいですね。

國弘 ありがとうございました。

ところで先生、外国语学習には根気が必要だとおっしゃった、学生時代でなければ外国语などは身につかない
(p.11へつづく)

成熟期を迎えた日米関係

KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

両首脳の単独会談に随行するなど、さすがにくたびれていた。ワシントン以来、心ならずもいろいろなことに巻き込まれ、緊張の連続だった。睡眠時間も限られていた。前の晩もおそかった。ぼくらはニューヨークのウォルドルフ・アストリア・ホテルに投宿していた。ときおり窓を打つ小ぬか雨が、ぼくのまどろみを妨げた。

前の晩の日本協会主催の講演会は大の盛況で、1,100人を上まわる出席者を集めた。さしもに広い同ホテルの大宴会場が、人いきれでむんむんとしていた。旧知のコナー元商務長官夫妻とフリーマン元農務長官夫妻をみつけたぼくは、人ごみをかきわけ、三木さん夫妻に引き合わせた。思わず抱きあって久闊を叙しあう3組のカップルに、好意と好奇心に充ちた多くの目が吸い寄せられる。

三木演説に先立ち、日本協会のジョン・ロックフェラー会長が、同氏一流の生真面目で正攻法の演説を行ない、今夜のゲスト・スピーカーを紹介する。華やいだ、ざわざわした雰囲気が一瞬静まりかえる。永年の知己としての友情と親しみとが、ここかしこに感じられる紹介だった。

開戦2年前、昭和14年という年に、当時一介の青年代議士三木武夫が、すでに国政を手中に収めていた軍部の敵意をよそに、日米戦うべからずという運動を展開、真に国を憂える至情を訴えた、というくだりでは、しわぶき一つ聞こえぬ静寂が会場を打った。ロックフェラー氏の声もともすればふるえがちだった。

やがて開戦、戦前の平和運動が禍いして、軍部や特高の狙うところとなった彼は、翼賛選挙ではついに非推薦の憂目をみる、ことばを継ぐロックフェラー氏。が彼は、その圧迫をはねかえして当選、その稚ない政治生命を守りつけた。それが今夕のゲスト・スピーカーを迎えた契機であった、と同氏が声を励ますと、一転、大会場は拍手のうずに投げ入れられるのだった。立ち上って拍手を送る聴衆もいた。拷問室(torture chamber)と仲間うちで呼ばれる通訳ブース内のこの元同時通訳者も、思わず声のコントロールを忘れる程だった。

ロックフェラー氏の紹介は、さらにつづく。同氏をもってしても異例の長さだった。彼は、ヒロシマ、ナガサキに触れた。悔悟の念いは、その莊重かつ悲壯ともいえる声の音から明らかだった。あの地獄の業火の日から、ちょうど30年の歳月が流れていた。多くの紙誌が、ヒロシマ・ナガサキの特集記事を翻していた。反省を籠めてだった。

同氏はまた、インドシナでのアメリカの錯誤にも言及した。アメリカ人だけでも、5万数千の若い血が流れ、戦費は無慮4千億ドルにものぼった。そのまがまがしさを静かに、沈痛に、悼みの念もあらわに彼は語った。ふたたび会場には静謐がもどった。

ロックフェラー氏の発言が、数日前の三木演説に照応するものであることは明らかだった。ワシントンのナショナル・プレス・クラブで、彼は直接ヒロシマ・ナガサキの悲惨に触れこそしなかったが、絶対に日本が核武装への道を歩むことはなく、また歩むべきではないという日本人の悲願と、核廃絶への信念とを諄々と語った。ヒロシマ・ナガサキへの痛恨の想いを押え、核武装した日本がアジア太平洋地域の不安定要因になる怖れと、平和と安定への逆行を意味するという認識をおもてにしての訴えだったことが、かえって訴求力を強めた。現にベトナム以降のアジア情勢の中で、日本が独力で核武装や重軍備化に進むのではないか、という懸念——しかし、懸念である——は、アメリカ各界の有識者の間には根強く存在する。

同演説は、むろんベトナムにも触れていた。ベトナム戦争こそが、日米関係ののどもと深く突きささった骨である、というのが彼の一貫した認識だったが、演説ではその点を踏まえながらも、空しく散ったベトナム、アメリカ両国民の犠牲を悼み、死者を甦らせることが不可能であることを惜しみつつ、彼らの至高の犠牲を無駄にしないためにも、平和の構築のために創造的な協力の確立を、と訴えた。リソカンのゲディスバーグ演説の精神が、その下敷きにはあった。ロックフェラー氏の発言が三木演説を響けてのものであったことは、容易に想像さ

れた。

ロックフェラー氏の紹介は、まだ畢らない。同氏が言及したのは、三木演説が強調した「試練に立つ民主主義」というテーマだった。これは、トインピー教授の *Civilization on Trial* という名著のタイトルを借りたものであったが、いまや西欧型の議会制民主主義の退潮はおおいがたい。世界最大の人口を推する民主主義国インドは、すでに全体主義の陣営に走った。ポルトガルやイタリアもそのひそみにならおうとしている。フィリッピンのマルコス政権や、韓国の朴政権はお義理にも民主主義とは評しがたい。

他方、民主主義国自体、国内的な混乱と、政治行政の動脈硬化現象は随所にあらわである。代議制民主主義を標榜しながらも、一般国民の4割以上の積極的な支持、もしくは消極的な容認を享けている政権は、もう一つものこってはいない。政治家への不信も着実に侵透しつつある。地方自治の大原則も、たとえばニューヨーク市財政の破綻に象徴されるように、その空洞化は否みがたい。不況の中のインフレ、というステグフレイションも、従来の教科書にはなかった新現象として、経済専門家を分裂させ、あるものはアクセルを踏むことを、あるものはブレーキをかけることを主張するなど、混迷は深い。民心また、手間ひまばかりかかって、能率の悪い代議制度に倦みいらだち、簡単にことが決まっていく高能率な制度を希求するかたむきも、徐々にではあるが醸成されつつある。

このような認識の上に立ち、ぼくらはあらかじめ三木さんに対し、この辺に石を置くことの重要性を強調していた。幸か不幸か、この度の首脳会談は、早急に解決を迫られるような実務レベルでの外交案件を欠いていた。実務を担当する外務官僚の出番が、従来より限られていたのは、何よりもこのためで、巷間、週刊誌などがことあれかしげに書きまくっている、首相官邸と外務省との隙間風というようなものではなかった。沖縄返還や纏維交渉というたぐいの案件は、皆無に近かったのである。外交実務家のもつ短かい目盛りの物差しとはちがった、より長く広い異質な物差しが、ぜひとも必要だった。あわせて、日米の「力関係」もちがっていた。ベトナムでの挫折や、ウォーターゲート事件の経緯は、アメリカ人の対日姿勢を質的に変えていた。彼らの対外政策への自信には、大きなひび割れができていた。そしてそのひび割れの最大の根拠は、國の内外で表面化してきた民主主義の統治能力の衰退現象であった。

三木さんに、たとえば過日の日米欧委員会・京都会議の情況を子細に報告しておいたのは、このあたりを見据

えてのことであった。いわゆる先進社会——いやなことばではある——を代表する各界の指導者が参集したあの会議では、民主主義の governability（統治能力）が最大のトピックであった。懸念とともにであった。ぼくは昨年10月、夙に自分のテレビ番組で、「試練に立つ民主主義」をテーマに、この新しい概念と用語とを、コロンビア大学のカーティス博士ととり上げていたが、そのテキストを含めて、あらかじめ勉強してもらっていた。思わぬところで「トーク・ショー」が役に立った。あわせて、『世界週報』誌に寄せた「ポスト近代の戦略をこそ」という一文も読んでもらっていた。Governability の消退を前にして、これを近代の生み育てた諸価値や諸制度の質的変貌と捉え、近代後に備えた攻究の必要を説いたものだった。

三木さんの長所の1つは、知的とくに文明論的なものの関心が強いことと、若い者だからといって「人によって言を廃しない」点である。よくぼくらのいうことも耳を傾けてくれた。あわせて7月28日号の『タイム』誌に出たフォード大統領のインタビュー記事を提出しておいた。ここでも論じられていたのは、民主主義の運命であった。インドの脱落がきっかけになったインタビューである。

いま一つ、ジャナリズムの世界で神格化すらされているジェイムズ・レストラン大記者（ニューヨークタイムズ紙）の論文にも目を通してもらっていた。題して「民主主義の危機」。さすがにレストランの名にそむかない堂々の大文字で、三木さんの感慨も深いようだった。

このような準備の上での、ワシントン演説だったことは特筆されてよい。実務という内堀は大幅に専門家に委ねながらも、実務以外の文明論次元では、あくまで政治リーダーとしてのイニシャティヴを保持した。むろん演説は自分でしたためた。ただ、平沢和重氏や、若干はぼくの意見具申にも心を閉ざさなかった。いわば広い視点から外堀を埋め、内堀と相呼応して本丸や天守閣に迫るという戦略であった。そこには、世論に対する配慮があった。日本にも増してアメリカが世論の国であるという認識があった。

ぼくらの強い要請を容れて、準備されたテキスト以外に、アドリブ発言を行なったのも同じ配慮からであった。ご案内のように、アメリカ人というのは、spontaneity を高く評価する。原稿の棒読みでは、彼らの心を動かすことはむつかしい。とくに他人が書いたものを棒読みすることに馴れている日本のオエラ方の「演説」が、官僚の物した絞切り型の作文であることも手伝い、彼らの退屈と、ときとしては失笑をすらかうことは、従来もしば

しばみられたパターンだった。

今回は、彼自身の手になるものだけであって、その点は心配していなかった。十分に個性的で、彼一流の政治哲学や外交姿勢の開陳があった。がしかし、もし草稿をはなれて、個人の感懷を off-the-cuff で述べてくれれば、なおのこと強い印象を彼らアメリカ人ジャーナリストに与え、ひいてはそれが一般のアメリカ市民に伝達され、成熟期にさしかかった日米関係の曲りかどにふさわしいエポックを画すことになるであろう。これがぼくらの思いであり、日本にとって、日米関係にとってきっとプラスになる、と信じてもいた。その上、三木演説はテレビ以外にも全米180に近いラジオ局を通じ、同時放送される。これまた従来なかったことである。この機会を逸してはならない、という思いがぼくらを捉えた。日米両国が、そのかかる問題と直面する挑戦の同質性においてパートナーであるばかりか、その克服を通じて、先進世界はむろん後発の第三世界にも寄与できるという可能性においても同志たりうる。この認識を一般のアメリカ国民に伝え、経済大国は即軍事大国といいう今までの常識を放棄して、日本は決していつか来た道を歩まない、という深く静かな民族の決意を理会してもらう何よりのチャンスである。しかも彼は、かつて若い日々にアメリカに遊び、ヒトラー台頭期のナチ・ドイツやムッソリーニ全盛期のファシズム・イタリア、さらにはスターリン治下のソ連を見聞し、アメリカの自由と民主主義の実体と比較対照する機会に恵まれている。折しも、暗く重苦しい軍国主義全体主義の軍靴の足音が、そのひびきをおぞましくも高めつつある日本でもあった。多感な青春の日々に焼きついた民主主義への熱い思いが、日米不戦の運動を手がけた原動力であり、その後の多難な政治活動のささえであったとするなら、一切のはにかみを捨て、率直に自らの描いた軌跡を語るべきであると、強く進言した。

ぼくの尊敬する何人かの官僚やジャーナリストの友人も、その切言に唱和してくれた。アメリカを熟知し、日本人の将来と日米関係の未来とに心をくばる彼らの見識と志操の高さに、心からの敬意を払う。三木さんが、彼一流の含蘊を捨て、面映さを押して、ぼくらの願いを受け入れてくれたことも、ありがたかった。ことは、一人彼個人や一内閣の消長を超え、日米関係が一大転機を迎えた今日、日本人全体にとって有意義なことと思われた。彼自身、自分の人気や内閣の強化云々というケチな次元では考えていなかったに相違ない。情理かね備えた切々たる発言だったからである。はたせるかな、大きな拍手が会場を揺るがせた。ぼくの同時通訳——それまで

はいわば同時音読だったが、アドリヴ部分は文字通りの同時通訳——も、まずはの出来だったらしい。テレビその他で何回となく取り上げるなど、同様の思いをくりかえし書き語ってきたからでもあろう。「こと」と「ことば」と「こころ」との三位一体を改めて痛感する。

ふと気がつくと、ロックフェラー氏の紹介はおわっていた。いよいよ本番である。ぼくは一つせきばらいをして声を整え、どうめりはりをつけて同時音読するかに心をくばった。原演説を活かすか殺すか責任は重い。なにしろ1,100人の大聴衆である。訳文をただ単調に読み上げるだけでは不十分であった。原スピーカーのこころをどうしたらぼくのことばを通じ、ことに則して有効に伝達できるかに賭けた。そしてどうやらひととおりのできばえだったらしい。

窓を打つ小ぬか雨に、まどろみを破られたぼくは、分厚いニューヨータイムズ紙が、とどけられているのに気づく。昨夜の会合にも、ワシントンの講演にもレストン老は顔をみせていた。昨日の中食会にも招いてあった。レストン氏には何とか会うように、というのがぼくらのいま一つの進言だった。

ずっしりと重い同紙をめくるぼくは、ほどなく同氏の署名入り論文に目がとまる。ケネディですらレストン論文に目を通すときは、思わず動悸が早まったという。彼にくさされたときは、1日中憂鬱そうだった、と側近は書き記している。それほどの重さを彼の言論はもっているのだ。ベンは権力よりも強いのである。ぼくごときが、胸高ならせて目を走らせたのも当然だった。「広島から30年」(Hiroshima Plus Thirty)と題したこの論文は、レストン老の息づかいがそのまま伝わってくるような筆致でつらぬかれていた。三木発言に心動かされて書いた文章であることは明白である。原文訳文とも日本のマスコミにも転載されたが、読まれた方はきっと同感して下さるにちがいない。

ホッとした。何かを無理矢理に押しつけられ、恐れ入ってそれを受け入れるという日米関係は明らかに終焉した。日米関係は一つの曲り角を曲った。外濠を埋めるという作戦はみごとに成功した。その象徴がこのレストン論文だった。ぼくは新聞を鷲づかみにして26階の部屋を出た。目指すは、32階の三木さんの部屋だった。ふところの深い大ホテルの廊下の奥にあるエレベーターまでの距離が、分厚い絨毯に足をとられてか、いつになく長かった。

(国際商科大学教授)

差別用語追放運動をめぐって

CHIKUSHI TETSUYA

筑紫哲也

「差別用語」をめぐる論議がさかんである。この論議を見聞きするたびに私は「アーチー・パンカー」のことを思い出す。

私の在米中('71~'74)ほとんど終始、テレビ番組視聴率の首位ないし上位を走っていた“*All in the family*”のことは、すでにいろんな機会に何度か書いたことがあるが、このコメディの主人公がパンカー氏なのである。そしてこの番組の人気の中心はアーチーがわめき散らす差別用語、とくに人種に関係するそれであった。

ニューヨークの中流の下、または下層に属する労働者であり、無教養、タカ派、そしてなによりも人種差別論者であるアーチーは、口をきわめて汚ないことばをまきちらし、「オレのおかげで食っているくせに、生意気なリベラルのボーランド野郎」の娘ムコと事ごとにケンカし、近所の黒人をバーに連れこんで「お前たちはアレに効く特別な薬があるんだろ」と精力剤の秘伝をせしめようしたりする。

多民族複合国家とはいえ、よくこれだけ人種蔑視の隠語に調い表現があるものだと、パンカー語録のリストを作りながら呆れ果てたものだった。

CBSはじめこの番組を放映するのにビクビクものだったという。経営首脳陣は一度はこの企画を却下したが、製作側スタッフがねばって放映にこぎつけたのだという。

わが国での最近の差別用語問題トラブルも主舞台がテレビとなっている。米国テレビ業界に「用語いいかえ集」のようなものが存在するかどうかは知らないが、タブーや内々の code が存在したことは確かである。

それをみんなブチこわし、むしろこれに挑戦するような番組を全米一の大ネットが始めるのだから、戦々競々としたのも当然であろう。結果は大成功で、ニュースウィークやタイムはその社会的、政治的意味を含めた大特集を組み、コラムニストは次々と取り上げ、アーチーのぶつ人生論や政治論を整理したパンカー語録（毛沢東語録の亞流的代物）やらシャツ、スティッカー、ジョッキ、ワッペンなど「パンカー関連産業」が大にぎわいを

示すという有様だった。

が、この“事件”的なかでもっとも注目された現象は当初予想されたような関係団体、関係者からの抗議、批判がほとんどゼロだったことである。

パンカー人気の秘密についてさまざまな解釈が当然下された。

頑固で旧弊なアーチーの言動を「バカだなあ」とゲラゲラ笑っている面もあるし、逆にこの人物を「正直者」だと共感をもって眺めている面もある。もともと反知性主義の風土があるうえに、'60年代リベラリズムへの反動で右翼化が目立った時代相と合致していた面もある。アーチーは「法と秩序」の熱烈な信奉者であり、尼克ソンやウォレスの支持者層とオーバーラップする性格を与えられてもいた。が、こうした解釈のちがいをこえて共通要素として摘出できるのは、米国人の間に出てきた一種の「ゆとり」であったと思われる。

パンカー氏は米国人の気持のなかに多かれ少なかれ存在する「内なる私」であるし、数年前にはそういう偏見はもっと濃厚に米国の多数派が持っていただろう。だが、その「私」を客体視して「バカだなあ」と笑うだけの経験を米国社会はこの何年間経てきた。

一方、黒人、女性をはじめとするマイノリティ勢力にとって、その主張、目標には程遠い社会だとはいえ、少なくとも自分たちの主張を胸を張って唱えるだけの地歩はこの経験の過程で築いてきた。パンカー氏がテレビ画面に現われてきたからといって、すぐ目をつり上げてテレビ局に駆け込むほど、じめついた被害者意識にとらわれる、自信のない運動ではなくになっている。そして一般的な米国人、つまり視聴者にとって、これまでの経験の過程で生み出された一種の「偽善」からの解放感をパンカーの汚いことばのなかに見出したということなのであろう。

戦後、米国映画から「生きた英会話」を学ぶためにシリオ対訳を買ったり、同じ映画を見に映画館に通った日本人は私を含めて多いはずだが、実は米映画やテレビでの会話が、一般米国人の日常会話とはかなり距離のある

きれいごとの会話、つまり「生きた英会話」でないことは米国で暮した人であれば誰しも気付くことであろう。

皮肉なことに、そんな苦労をせざとも英会話を学ぶ方法や機会に恵まれているいま、米国映画は「生きた会話」を学ぶ本当の“教材”と化している。米国映画が古い作品か新しいかを占う一つの目安は、その映画にどのくらい汚いことばが出てくるか、とくに女性の登場人物の用語法に注意することだという気が私はする。この面での「自由化」は映画の方がテレビよりずっと早く、知性派の美女女優、キャンディス・バーゲンが、“Shit!”などという言葉を吐き散らした（*Soldier Blue*）のはずいぶん前のことだが、今ではそんなことが“事件”にならないくらいあたりまえの現象となってしまっている。

こう書いてみると、私はいまわが国で行なわれている差別用語の追放運動に水をさしているように受け取る向きもあるかも知れない。が私の真意はそうでない。「ことばだけを追放しても差別はなくならない」という論拠で、追放運動を表面的だとして批判する声が強いようだが、差別用語を追放することも差別を追放する運動の一つとして実質性はあると思う。私は新聞記者になって最も激烈なショックを受けたのは未解放部落に取材に出かける機会を与えられて同和問題を知った時だった。ライシャワー刺傷事件の時はたまたま厚生省詰で、自分を含めて精神障害にいかに無知、偏見が多いかを痛感した。差別用語を糾弾することは世間の無知、偏見を正す貴重な機会を与えることになり意味は大きい筈である。

ただ、私に留保があるとすれば、こうした追放運動は「差別（用語でなく）をなくす」という大目的を貫徹するために行なうべきで、この目的を遂げるための弾力性を持つべきだということである。

運動の“行き過ぎ”的例として「つんぼ棧敷」や「めくら縞」までがいけない、古典落語は軒並みやれなくなるといった話が流布されている。そういう通説を作り出すような神経症的なやり方が行なわれているとすれば、差別をなくすためにはマイナスになりはしないか。人々をますます偽善に押しやることは、わが国でもいつの日か「アーチー・パンカー」の需要を生みかねない。

直接的な表現を避けて、いい代えるいわゆる婉曲語法については、私の英語の師であり尊敬する悪友である國弘正雄氏が大変面白い著作をものしていられる（『アメリカ英語の婉曲語法』上、中、下＝エレック選書）。

この本を読んでも、婉曲語法が果たして百分の善なのか、判断に苦しむ。米国の黒人が“coloured”と呼ばれた時代は彼らがもっとも悪質な差別に苦しんだ時代だった。いま彼らは“black”と明確にいわれるなどを好む

し、胸を張って自らもそういう人が多い。政治用語の婉曲語法に至っては、洋の東西を問わず、偽善の色が濃い。國弘氏はベトナムの爆撃をニクソン政権が“空からの支援”と呼び続けた例を挙げていられるが、わが国で「善處」「検討」といった多用語が政治的にどんな含蓄を持っているかは周知の事実だろう。

「婉曲語法とはいしたことなのか、悪いことなのか」というおよそ原始的、非学問的な私の質問に、國弘氏はさすがに「いいのと悪いのとがある」などという月並みな返事はされず「正直のところ、そこが終始私の疑惑なのだ」ということであった。

差別用語追放問題について「留保」を続けるよう心苦しいが、差別の実態を知らせるドラマやレポートで出てくる差別用語まで追及するのには私は賛成でない。

この点について私が思い出すのは、“Fiddler on the Roof”というミュージカルである。先にあげたアーチー・パンカー氏がテレビでの近年の最大の主人公だとすれば、このミュージカルはブロードウェーで史上最大のヒットとなった作品である。ユダヤ人のロシアでの迫害という社会的背景の下で繰り広げられるこのホームドラマを見て、涙を流し感激していく知人に對して、新聞記者の悪癖が身についた私は、「ああ、ここにもユダヤ人のキャンペーンにやられた人がいる」という感想を禁じえなかった。ロシアに限らず、世界中で差別と迫害の対象となつたユダヤ人が、このドラマで訴えているのは、そしてその訴えが理性だけでなく感性にまで届く訴えをして見事な成功を収めているのは「私たちも人間なのだ」という一事なのである。そしてこの訴えは「ユダヤ資本の陰謀」といったどす黒いものではなく、きわめて正当なユダヤ人の主張だといえる。ただ、指摘したいのは、芸術、娯楽の面で米国内に強い地位を築いているユダヤ系が自分たちの訴えを有効に伝えるのに有利な条件をもっているという点である。シオニズムの正当性を訴える作品は枚挙のいとまがないほどだが、あなたはマホメットの伝記映画を見たことがあるだろうか。（こういうコラムであげるにふさわしい小説家ではないがベストセラー作りの名手ハロルド・ロビンスの最新作“The Pirates”ではアラブ系の主人公がマホメットの伝記映画を米国で作ろうとして失敗するエピソードが出てくる。）

こういう論議は、部落解放運動のなかで長い間続いてきた「寝た子を起すな」論争につながる要素を含んでいる。ただ、差別用語をめぐるトラブルが悪意よりは無知から起きていることが多いのを見ると、その無知を追放するための攻勢的な働きかけが、差別用語をなくすということ以上に必要な気がする。（朝日新聞政治部）

On Studying Japanese Politics

Daniel I. Okimoto

Lecturer

University of Michigan

Japanese politics is not widely understood around the world. Many consider it essentially "inscrutable". It is perhaps not hard to see why. A foreign scholar who wants to specialize in the study of Japanese politics faces several imposing obstacles. Even though he may have spent several years in acquiring the tools of his profession, including mastering political science theory and methods, and even though he may be thoroughly familiar with politics as practiced in his own country, he must be willing to invest several more years on top of that to training in the history, culture, and language of Japan. It is a long process. Just the completion of the doctoral degree, a strict requirement for college teaching, usually takes anywhere from five to seven years of graduate work.

Since Japan is so different in many respects from other countries, he must be prepared to exert a great deal of time, energy, and patience before he can hope to acquire an intuitive feel for what happens in the world of Japanese politics. The amount of effort needed sometimes seems overwhelming. Take the study of the Japanese language as an example. Unlike French, German, or Spanish, which are comparatively easy languages for speakers of English to learn, Japanese is undoubtedly one of the world's most difficult, and this is seen in the fact that not many foreigners are able to read, speak, and write Japanese fluently.

Even those who have mastered the language must learn how to interpret the subtleties

and ambiguities of Japanese as it is used by politicians. This is no easy task. Part of the art of politics is to make statements as vague as possible so as to avoid later responsibility. It is not at all uncommon for bureaucrats or politicians to use double or triple negatives in a single sentence. The foreign observer must cut through triple negatives, weigh subtle differences in nuances, separate public postures (*tatemae*) from real intentions (*hone*), and arrive at an overall judgment of the statement's true message.

Once equipped with an understanding of the language and culture, the foreign scholar needs to reside in Tokyo for lengthy periods of time in order to be exposed directly to the events taking place in Kasumigaseki. It is desirable that he meet and talk with individuals who are actively involved in the daily affairs of politics, including Diet members, bureaucrats, journalists, businessmen, labor union leaders, and interest group representatives. It is not enough to follow events from a distance by reading newspapers and magazines. So much of what goes on in the political world is not visible to the public. Factional maneuverings, party strategy, secret meetings, and such, which take place behind the public stage, have a great bearing on the course of events. It is important in many cases to have access to information about such activities.

This is one reason it is so hard for foreign observers to comprehend the full dimensions of the political processes in Japan. While an

American residing in Tokyo can read the *New York Times* and *Newsweek* and get a fairly good feel for what is happening in Washington, he is much less likely to know the real situation in Tokyo by reading the *Asahi Shimbun* in New York City. Newspapers and other mass media networks tend to cover only the broad outlines of events. Journalists in Japan know a tremendous amount about backstage developments, but they are not willing or able to print all that they know and what appears on the front pages of the major dailies is often only the barest sketch.

Of course, if the foreign scholar is content to follow only the contours of politics in Japan, then he can do so from within the walls of his office in Los Angeles. But if he thinks it important to understand the details of why a particular decision was reached or what the underlying dynamics of the political processes are, then he must be willing to make periodic trips to Japan and spend blocks of time witnessing the interaction of factions, the tactics of party leaders, the decision-making processes within the ministries and parties, the operation of the Diet, the contacts between party and outside organizations, and the complex web of human relations that interweave sectors of society together in one tightly-knit entity.

There is so much that is fascinating about politics in Japan. Perhaps one of its most

striking aspects, for example, is the manner in which conflicts are handled. All societies have conflicts. The task of politics is to regulate these tensions. In the case of Japan, the remarkable lack of deeply-rooted cleavages in contrast to historical, regional, racial, ethnic, and religious divisions in most other societies means that society is probably less racked with conflicts arising out of such structural cleavages. In addition, the Japanese have developed many techniques of avoiding, softening, redirecting, modifying, and controlling conflicts. In an island nation like Japan where people are packed closely together conflicts have not been allowed to turn into absolute confrontations similar to those seen, for example, in the religious wars in the West. The Japanese have a genius for compromise and adaptability, and this is evidenced in the operations of politics in the postwar period. It is one reason why politics in Japan is so stable.

Because Japanese politics is still not understood very well around the world, foreign scholars and their Japanese colleagues have a responsibility to seek to widen and deepen international knowledge among other nations. Unless this is done, Japan will continue to be misunderstood or called "inscrutable". The label of "inscrutability" is often only an excuse for perpetuating ignorance. Japan is much too important a country to remain "inscrutable".

(p. 4 からのつづき)

とおっしゃった。たしか外務大臣のときだったと思いますけれども、お手製の英語の単語カードを役所往復の車中で一生懸命くくっておられたことを想い出すわけですが…。

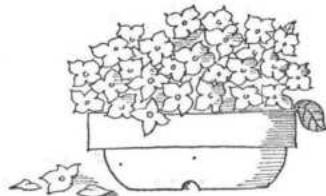
三木 やはり vocabulary は忘れてしまうからね。実際に使う場が少ないから。しかし若い時に英語の骨組みと、日常使われる2000～3000語見当をちゃんと頭の中に入れこんでおけば、忘れるものではないですからね。

國弘 しかし外務大臣として、いわば功なり名をとげた先生が、沢山のお仕事をもって心を日々にくだいてお

られるにもかかわらず、行き帰りの車の中で、昔の記憶を維持すべく努力しておられたというのは、私はみておりまして、我々若いものもしっかりしなければいかんなという意味で大変感銘があったし、恐らくいまの学生諸君も同じ感を深くすることと思います。

本当に忙しいところ、そして帰国早々でお疲れのところお時間をさいていただきましてありがとうございました。
(昭和50年8月12日)





(鼎 談)

英語教育改善策を探る

朱牟田夏雄 (中央大学教授)

太田 朗 (東京教育大学教授)

平野 敬一 (東京大学教授)

編集部 英語教育の改善、あるいは英語教育はこんなことでいいのか、という意見はたしかに今に始まることではありませんが、特に昨年8月ELECでのパネルディスカッション*などを皮切りに、雑誌『諸君!』誌上における「平泉・渡部論争」**などに代表される問題は、これまでの英語教育論争の延長上にあると同時に、新しい局面を迎えていることを示しているのではないかと思われます。それで『英語展望』でも3回にわたって「英語教育の現状と改革の方向」と題して特集を行なってきたわけですが、今回は戦後の英語教育の発展に努力し、現場英語教師三千六百余名の同友会員を持つELECとしてもこの問題に発言していただきたいと考え、お3人のELEC理事の先生方にご意見をお伺いしたいと存じます。

朱牟田 英語教育の改善ということはとくにここ1年だいぶ各方面の話題になってきまして、そろそろ一応のしめくくりをつけたらということですが、まず現在の中高、および、場合によっては大学の英語教育というものがどういう問題をはらんでいるか、それが第1の問題点、その次にそれをどういうふうに改革していくかということを話し合ってみたいと思います。

平泉氏もそうだけれども、それ以外にもよく聞かされるのは日本の英語教育が実際に役に立っていないないという議論。中学から高校、大学の教養課程まで最小限8年は英語の授業を受けている、しかし外人と話ひとつできず、手紙一本書くことができないという論議は最近はじめたわけではないが、その辺から話題にして現状分析をしてみたいと思います。

「役に立つ英語」とは

太田 役に立たないという意味ですが、これは英語に限らないと思いますけれども、学校でやっている、特に中学、高校でやっている教育というものは、そのまま社会に出てすぐ役に立つということはまずないと思いま

す。生徒が社会に出て職業とか置かれた立場に応じて必要な訓練をして、それで役に立つようになると思うので、ただ学校教育というものは、そういうものの下地になるような普通の教育を施す。つまりどういう方面に行くにしても、それに職業や何かに応じてある訓練を加えれば役に立つようになるというような下地をつくるということだろうと思うのです。

英語教育も同じようなことで、学校でやったことが、ある職業についた場合に、そのまますぐに役に立つということはまずあり得ない。これは大学での教育でもそうかもしれないくらいです。それで中学、高校でやる英語教育というのはそういう意味での下地というか、基礎的な訓練をするところであるというふうに考えられる。

ところで基礎的な学力を養うという意味ですが、よく誤解されているのは、vocabulary の問題として主として取り上げられているということです。

しかし言語の構造というのは、文法の構造と発音のシステムと vocabulary と3つあるわけで、基礎的な学力という場合には、その3つを考慮しなければいけないと思う。その中で vocabulary の範囲というのは、母国語の場合も同様ですけれども、その人の職業とか興味とかに応じていろいろちがってくるわけですし、また一生を通じて変化していくものです。したがって中学や高校では、ほんとうに普通の少数の vocabulary に限って、基礎的な学力のほかの面、すなわち発音と文法構造というものをちゃんとマスターするというのがおそらく基礎的な学力の意味だろうと思います。

発音の問題に関していうと、習い初めが非常に大切だということです。これはどんな発音をするにしても、何らかの発音をしなければ言語というのはできないわけで、sometimes をソメティメスと発音するという人が昔いたそうですけれども、ソメティメスと発音する人でも、やはり一定のルールに従って発音しているわけで、

*『英語展望』No. 48所載。

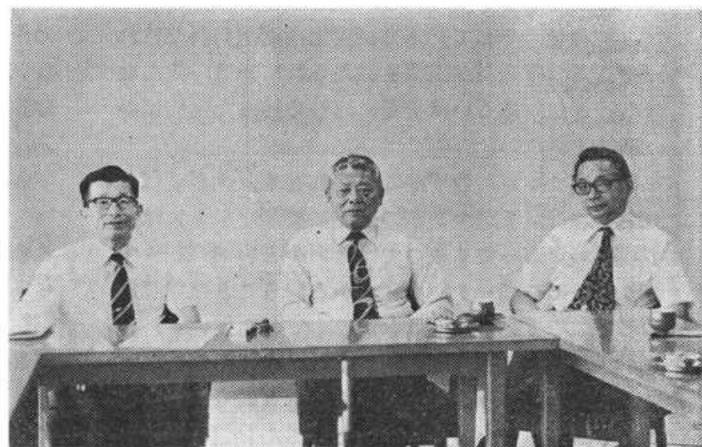
**『諸君!』1975年4-8月号所載。

どうせ覚えるならちゃんとした発音を初めから教えておいたほうがいいということは明らかです。これははじめにしっかりした指導をすればそれほど労力がかからないで、初めに発音のちゃんとしたくせがつくようになると思うのです。その意味で中学校の先生はいい人が行かなければいけないと思います。

2番目の、文法構造というのが、非常に見逃がされている問題です。去年教育大は2つの学部だけが入学試験をやった。そのときの和文英訳の問題で、「私はきのう金魚を10匹買ってきて庭の池に入れておいた」というのがあった。金魚という単語は実にいろいろな訳が出てきて、red fishとか、kingyo fishとかfish covered with goldとか色々あった。しかしそれはそれほど大きな問題ではないと思う。一番問題だと思ったのは、「金魚を10匹買った」というのを I bought (gold) fish about 10 yesterday. と書いたのが100人中15,6人いるわけです。これでは「昨日10時頃金魚を買った」になってしまふ。中学から高校を通じて、fish about 10ということはだれも教えたことがないはずだけれども、15,6人もいた。

文法構造ができないということですが、これは red fish と書くよりもはるかに罪が重い。単語がわからないとすぐ辞書ひくでしょうが、red fish about 10と書いた人は自分が間違ったということに中々気がつかない。だからなかなか直らない。英語では数量詞が必ずnoun の前にいくというような、きわめて初步的な文法構造ができない。それへむずかしい単語をやたらに教え込むために基礎的学力ができないということになる。

そういう意味で中学校あたりでやっている英語では、基礎的な文法構造ができ、発音ができれば、vocabulary の数はそんなにふやさなくてよい。ごく普通に使われている日常の vocabulary だけを問題にしていく。あと大学へ行って専門に応じて vocabulary を習得するということを考えればよい。ところがもし中学でいまいったような発音とか文法構造とかいう基礎的学力全然なしに、大学へ行つていきなり外国語が必要になったといつても、一朝一夕にはできないと思います。だから基礎的学力をつくっておいて、そのあとはその学生の自分の専門に応じてやっていけばいいことですから、初めから5%の人に限って、やったらしいということには必ずしもならない。基礎的学力をちゃんとつけておけば、あのほうはわりあい簡単にいくと思うのですけれども、それがうまくいってないというのが現状だと思います。



左から太田朗先生、朱牟田夏雄先生、平野敬一先生

もし役に立たないということが、すぐに役に立たないということなら、それはもともと無理な話だし、それから、役に立たないという意味が、いまいったような意味での基礎的学力ができないということだと、これはやはり考え直して、もっとちゃんとしたことをやらなければいけないと思います。そういう教育の内容の面が、今までの議論で欠けているような気がするのです。

平野 例の平泉・渡部論争というのを、ぼくなりに読み取った感じではこうなんです。平泉さんは、現在の英語教育というのは実際に役に立たないじゃないか、大学出たって読めもしないし、書けもしないし、聞き取りもできない。つまり、太田先生がいまいわれた下地さえできていないのではないか、そういう批判と現状認識とが氏の試案の底にあるのだと思います。

それに対して渡部さんのほうは、今までの英語教育はそれなりにりっぱなものだ。すぐに役に立たなくても潜在能力を養うのが英語教育の目的なんだ。その点で十分成果をあげているし、日本の英語教師は自信を持ってほしい、というふうに現状をみているわけです。そういう現状認識のちがいが2人の論争の底にあるのだと思います。いま、かりに下地をつくることが役に立つことなのだというふうに一応限定しても、その肝腎の下地すらできないというのが現実でないか。そのためには日本の英語教育のシステムを何とかしなければならない、おそらく平泉氏のはそういう発想だと思います。

国民総英語教育の問題点

朱牟田 一つの問題点は、これはあまり英語の先生方

の賛成を得ないことだけれども、いま中学が全部義務教育になっている。そして英語は制度上は選択科目だけれども、事実はほぼ全員が英語を教えられている。そんなに英語が好きな、あるいは英語に適性を持った生徒ばかりがいるはずがない。

だから方法は非常にむずかしいけれども、大ざっぱないい方をすれば、6割か7割の生徒に英語を教えれば、よほど能率が上がってくるのではないかという気がする。どうやって6割—7割を選ぶかということは難問題だけれども、そういう situation の中で教えていく。いまの fish about 10というのを、まちがいであることに気がつきもしないような生徒が、2割も3割もいる。そういう中で苦労している先生方はたいへんお気の毒な立場だと思うのです。

しかし一面から考えると、日本の英語教育界というものは、非常に特殊な世界になってしまっている。自分たちだけのなれ合いで、ある程度のことを教えていれば、それで責任が果たされているような感じを持ってしまって、あるあきらめのムードの中で、かく教えるべしといわれた線に沿って、教えるようなふりをしている。

もちろん、一方に熱心な先生方がいらっしゃることは、私も十分認めますけれども、やはり全国の数多い英語の先生方全体を考えれば、そういうことがたしかにあると思う。ぬるま湯につかって、ただ与えられたことだけをやっていくような空気を、もう少し打破していくことが必要ではないかというのが、私の個人的実感としてはかなり強いのです。

平野 平泉試案の底には、全国民に英語を事实上必修させる根拠があるのだろうか、そんな根拠はないはずだという考え方がありますね。

朱牟田 その点に関しては私もないと思います。植民地の場合はともかく、独立国で、よその国のことばを、国民の90%以上に教えることを、事实上義務づけているところはどこにもない。

太田 いまの朱牟田先生の6割か7割でいいだろうということ、ただ、いまでも制度上は選択なわけです。事实上はほとんど全部がやっている。そうするとこれは制度の問題じゃないということになってしまう。つまり実際にそういうことを実施する段階になった場合にどうやって選択で6、7割になるようにするかという問題が出てくると思う。それが入学試験の問題とからまつてくると思うわけです。

平野 入試に英語が出なくなったら、事实上の必修という現在のいささか不自然な状況は解消するのではないかだろうか。

太田 そうすると今度は入試をどうするかという問題になってくるわけです。入試で英語をやらなければいけないという制度はないと思うのです。結局入試というものは大学が問題で、大学がどうするかということで高校の入試がきまつてきて、それが下のほうへいっている。大学が入試で英語をやらなければいけないというきまりにはなっていないと思う。そうすると大学側が、おれのところは必要ないからということでやめればその効果はずっと下へ波及していく。問題はいま制度上そうなってないのに事实上そうなっているということ、実際にそれをどうするかという問題は非常にむずかしいと思います。

それからデンマークとかスウェーデンとか西ドイツといういろいろな国で、外国語教育が義務教育で行なわれているかいないかというようなことは、各国の制度をもっと調べないといけないと思うのです。イギリスやアメリカは事情が別だと思うのです。つまり自分の国語が国連の公用語になっているような国では外国語をそんなにやらないでも事が足りるかもしれないけれども、そうでない国において、一体どういうふうになっているかということですね。

日本文化と外国语教育

平野 しかし、その場合でも、アメリカと日本は事情が特殊だと思います。上級学校進学率が抜けて高いのです。ヨーロッパで日本のように90何%も上の学校へ行くという国はないでしょう。日本で事实上義務教育のように英語を中学や高校、さらに大学で教えるという場合の社会的教育的影響というのはヨーロッパ諸国の外国语教育の場合とまるでちがうと思います。

太田 デンマークへ行ったとき、ぼくの泊まった下宿のおばさんはそれこそ義務教育を出ただけです。ところがドイツ語も英語もちゃんとしゃべる。これは生活の必要もあるし、それからデンマーク語と英語と近いこともある。だから彼らはあまり苦労しないで上達することができるわけですが、日本の場合は非常に問題がある。だから日本は効果が上がってないのはたしかだけれども、その理由の1つは、言語が非常にちがうとか、非常にかけ離れたところにあるとか、いろいろなことがあると思います。

朱牟田 Motivation が非常に低くて、そういう低いものを相手にして教えないわけならないぐらいついで、あるいはおもしろくないことはないわけです。

多くの日本人の家庭で英語がしゃべられるということはまずないので、1週に3時間なら3時間の英語の時間



朱牟田 夏雄先生

だけが、英語を用いる唯一の時間にすぎない。まず自然には英語的環境の中にはない。それだけにまた教師のほうからいえば、実につらい situation の中で教えなければならないわけです。またその効果ということからいえば、いくら英語をやっても、役に立つ形にはあらわれてこないのではないかということになるわけですね。

平野 西洋に比べると日本の社会では英語をどうしてもやらなければならないという motivation はそれほど強くないでしょうね。やらなければやらないで何とかやっていけますから。

太田 生活ができると思いますけれども、ただぼくはその点でもう1つ考えなければいけないのは、日本は言語的に homogeneous, monolingual な国ですから、外国語を全然やらない人間が非常にふえてくると一種の島国的傾向が出てくるおそれがあるということも感ずるのです。日本語で日本中どこへ行っても通用しますから。

平野 そういう島国的な閉鎖性を打ち破るというメリットは外国語教育にもちろんあるでしょう。ただそういうりっぱな大義名分で正当化しきれない弱味というか、本質的な欠陥が日本の英語教育の現状にあるのではないかでしょうか。

太田 もう一つだけつけ加えたいことは、教育というのは20年とか30年とか、相当長い目で見ないと効果はわからない。現在社会の中堅ないしはその上のところで活躍している人というのは、大体戦時中に教育を受けた人たちで、戦時中というのは英語教育は最も低調になった時代ですから、そういう人たちが英語ができないということが、もし根拠になっているとすると、それは戦時中の英語教育の結果がいまあらわれているのだといえる。それ以後、戦後になってから地道ではあるけれども、いろいろなことを考えて努力しているので、少しずつその効果が上がりつつあると思います。その効果はおそらく10年か20年先にならないと出てこないと思う。

平野 とかくマイナス面ばかり目につくが、いまの英

語教育のプラス面も、もう少し待てば出てくるということかもしれない。

朱牟田 日本が、昔、お隣の中国の文化を吸収する場合に、いわゆる漢文的訓読法というもので、中国のことばをことばとしてではなく思想を持った文章として、独特的返り点というものを発明して、つまり発音に関する限り全然ネグって、中国の文章というものを取り入れたわけです。返り点をつけて頭から日本語化して読んでいいっているわけです。そういうことをわれわれの先祖が長い間やってきた、またわれわれもそういうことで漢文を教わったのが、英語の初期の教え方の中に、非常に大きな影響を与えているわけです。

平野 いわゆる「変則」英語ですね。

朱牟田 何かそれに象徴されるように、英学、あるいは英学の前は蘭学という時代があったのだけれども、西洋の文物を取り入れなければならないというのが先で、とにかく何を書いてあるのかを理解する、発音はどうでもいいというやり方だった。

いまはそのとおりの教え方をする人はないにしても、いまのわれわれの教え方にもまだそれが尾を引いていて、たとえば主語があって、あとのはうにある object を先に訳して、前のほうの動詞をあとから訳す。あるいはもっと複雑な文章になって、関係代名詞が入ってくると、関係代名詞のあとから訳すほうが正しいのだとか、これは関係代名詞の前で一応切って、むしろあとを独立の文章のように訳すのが正しいのだとかいうようなことが、英語の先生の教え方の中で、いまおかなりの位置を占めているわけです。

外国の思想を取り入れるという点では、たいへんすぐれた知恵といえるけれども、外国語を外国語として学ぶという考え方、日本語ではない別の生きたことばを学ぶのだという意識が、いまでもまだ十分だといえないと思うのです。そこにも日本語の言語的に孤立した、非常に特殊な言語環境ということの、一つのあらわれがあると思うのです。

読書力と Oral Approach

太田 ぼくはそれはそのとおりだと思うのです。先ほど基礎的学力云々ということをいいましたけれども、公式的には、hearing, speaking, reading, writing, 4技能の調和ある発達ということをいっているのですが、実際に英語を必要とする人のうちの大部分は、まず第一に、本を読めるということだと思うのです。

それはまた誤解があるのだけれども、日本人は本は読

めるけれども、話はできないというのが普通ですが、その本が読めるという意味ですね、それがいま朱牟田先生のおっしゃったように、日本語に直してそれから意味を理解するという、あるいは場合によると横のものをたてに直すというところだけで、何をいっているかはまた別問題で、あとで考えるということをやっている。

それが1番端的にあらわれるのは、外国の大学へ行って、assignment の膨大なやつを出された場合で、とても読みきれない。スピードをもって内容をつかむという読書ができないと、ほんとうに役に立つ読書力といえない。

いわゆる Oral Approach の基本的な考え方というのは、入門においては oral から入る。終局的な目的は、本を読むことであっても何でもいいので、入るときにはとにかく oral で入る。ということは、oral でくせをつけると本を読む場合に早くなる。頭から読みくだして意味がつかめるような訓練というのは、oral で入ったほうが、翻訳であっちへいったりこっちへいったりして、関係詞節を先に訳せとか何とかいうことをやっているよりも、読書のスピードが早くなる。だからそういう基本的な考え方について、Oral Approach というのは、speaking と hearing をやるだけのものであるという誤解があるけれども、結局 approach というのは入り方が問題なので、読書力という点からいっても正しい方法だと思います。翻訳というのは特殊な技術で、単に内容を理解できるだけではなくて日本語を駆使できないとちゃんとした翻訳はできない。

朱牟田 日本語が特殊なというのは、文法の面でも発音の面でも出てくるので、たとえば「金魚を10匹買いました」といっても、「10匹金魚を買いました」といってもおかしくない。word order というようなことにしたって、よくいえば日本語にはたいへん flexibility があって、ある一定の順序に従わなければならないということは少ない。発音だって関東と関西でアクセントがちがう。けれども文章の中でいえば、それがわからないということはない。関西のアクセントで「ハシでめしを食う」というと、関東の人の中ではおかしいけれども、bridge でめしを食ったなんてだれも思わない。あの人の発音変だとは思っても意味は絶対に通じている。つまり発音、特にイントネーションとかアクセントというものが、外国语の場合にどんなに大きな意味を持つかという実感がない。やかましいことをいいやがるぐらいに生徒は思っている。

私の失敗談を申し上げると、アメリカにいたときカナダの Ottawa に行ったことがあった。帰ってきて、おれ

はオタワに行ってきた、とタにアクセントをつけていいたらなかなか理解してくれない。いろいろいりいっているうちに、ああアタワかというわけです。かりにアタワというのをオタワといつても通ずるだろうと思うのです。しかしタの

ところにアクセントをつけていったのではダメなのです。それくらいアクセントがちがうと通じない。つまりアクセントとかイントネーションがすべてであるような言語と、それがなくはないけれども、まちがっても通ずるような言語とのちがいですね。

そういうことで、英語の先生の仕事というのは実にやっかいなことにはちがいないけれども、要は太田さんのおっしゃったように、一番早い時期に正しいアクセント、正しいイントネーションを教え込む。これはいっぺんまちがったことを覚えておいて、あとで直さなければならないというのは二度手間で、それは初步のところでしっかりたたき込んでほしい。oral の方法などですね。

平野 まさにその初步のところがだんだん怪しくなってきたのではないか。基礎として発音の訓練は一応強調されていますけれども、いまの英語教育ではそれが實際はおろそかになっているのではないか。ぼくはそういう印象を受けています。

太田 ぼくはいまは中学校の先生は非常に関心が強いと思うのです。それからもう一つはテープレコーダーなどが発達してきた。それからラジオやテレビの番組もあるし、関心のある人はかなりできるのですけれども、ただ全体としてということになると問題になる。

朱牟田 E L E C の講習会などに熱心に来るような先生方は、ほんとうに正しい指導をしておられると思うけれども、残念なことに全体の中のパーセンテージからいえば少ない。

もう一つは、入学試験に戻りますけれども、もう少し音声面に関連した試験問題が出るようになれば、もっと一般の関心が高まるでしょうけれども、やはりまだ英文和訳、和文英訳、あるいは文法上の設問というようなも



太田 朗先生



平野 敬一先生

のが、圧倒的に大きなウェイトを占めていて、音をからませたような試験問題が非常に少ない。いい先生に教わった生徒ですら、まあこれはそんなにウェイトを置かないでいいんだというふうな意識に、入試を前にしてだんだんな

ってしまうことがあるのではないでしょうか。

それではこれから改善の方向もすでにある程度は出ていると思いますけれども、そちらのほうに話をしぶっていただいたらいかがでしょうか。

「平等主義」の功罪

平野 極論のようだけれども、改善の一つの方途として、学習者を減らすということを本気で考えてみる必要があるように思います。テープレコーダーとかテレビ、ラジオとか、音声を学ぶ条件がこれだけよくなつたにもかかわらず、必ずしも全体としてよくなつてないという原因の一つに学習者がふえすぎたという点もあるのではないか。ふえることによって、適性のないもの、やる気のないものまで入ってくる。そこに一つの大きな問題があるように思いますね。

太田 朱牟田先生のお話のように、入学試験に音声面というのはほとんど関係ないということもかなり大きな影響があると思います。

平野 これは出題者側の消極性とも関係しています。だいたい英語教師一般は、口でいうほど音声を重んじていないのが現状でしょう。少なくともそういう傾向のほうが強いと思います。

朱牟田 大学の教師も含めてそうです。

平野 これだけ学習者の人数がふえると、適性のない教師、適性のない生徒というのはどうしても入ってくる。そして適性のないものが適性のあるものの足を引っぱっている。これは無視できない大きな問題だと思います。

朱牟田 私もそれは痛感するのです。つまり一緒にし

て教えるために、できる生徒のほうがむしろ足踏みを余儀なくされるようなね。今度の協力者会議の答申*の中に、生徒の能力、適性、興味関心等に応じた学習形態のくふうや指導法の改革が望ましい、という一句を入れたのにもそれが関係しています。私は6割、7割論を唱えたのだけれども、これは少数意見で葬り去られた形ですが、ここにせめてもの抵抗があとを残している形です。

極端にいえば、能力、適性、興味関心等というの0から100までというつもりなのです。いま一般の風潮として、差別教育ということに非常に神経質になっているために、また神経質になる理由も決してわからないわけではないけれども、何でも十巴一からげに扱わなければならないというのは、一方にマイナスの面が大きいと思うのです。これがある程度でも行なわれるようになると、同じ3年生なら3年生といっても、ちがうことを行なっていてかまわないではないかと私はいいたい。それは決して英語だけではないと思うのです。体育のような学科はある程度適性、能力に応じた教育が行なわれているわけでしょう。当然だと思うのです。

平野 これは英語教育に限らないことですが、いまの教育で一番問題にされていないのは、才能や能力あるものが受けている計りしれない被害だと思います。落ちこぼれを防ぐとか切り捨てないようにするとか1人の落後者も出さないようにするとか、とかく弱者への温情に重点がいきすぎている。東大で英語を教えていても、これが同じ大学生かと思うほどできるものとできないものでは、その学力とそれに意欲がちがう。にもかかわらず、できてもできなくても同じベースでつき合いをさせられるのが今の教育システムです。できる学生こそいまの教育システムの最大の被害者だという感じがしますね。

朱牟田 東大の学生の中でそれほど大きな差があるわけだから、まして全国のすべての大学、すべての高校、すべての中学校の学生、生徒が同じレベルでいいはずがない、そういうのはずがない。

入試制度の問題点

太田 ただその問題と先ほどの入学試験と非常にからんでいるとぼくは思うのです。選択科目であるにもかかわらず大多数がやるというのは、結局入学試験のせいではないかと思うのです。ほかの科目でも同様だと思うけれども、入学試験に出る科目にみんな集中していて、そのほかの科目はおろそかになる。だから、かりに入試

* p. 20に全文掲載

験で英語をやってはいけないというと、ワッと減りますよ。ほんとうに好きなものだけがやるということになる。

平野 ほんとうに好きなものだけがやるというのはむしろ望ましい状況と考えられませんか。それが結果的にほんとうにマイナスになるかしら。

太田 入試で英語をやってはいけないということになると、英語はやりたくてもほかの科目に集中しないと、入学試験に通らないということになると、好ききらいにかかわらず、とにかく入学試験に出る科目だけに集中していくのではないか。それはどの科目を入学試験に残しても同じ結果になると思います。

とにかく死にもの狂いでやらなければ、自分の目ざすところへ入れないというような入学試験が行なわれているときに、入学試験に出ない科目で好きだからといってやるような余力のある生徒というのは、そういないと思います。そうなるとどういう科目を入学試験に残すかということによって、大多数の生徒の選択する科目はきまつてくるような気がします。だから入学試験全体をどういうふうにするかということがもっと根本的な問題だと思います。

朱牟田 それはおっしゃるとおりだと思う。きょうのお話も、役に立つか立たないかということから始まっているのですけれども、すべて世の中のものの見方が非常に功利的になってきていると思います。昔は入試の科目に関係のないものでも、好きな科目はやるという中学生はいくらでもいたと思う。そのために入試1年2年足踏みをさせられてもおれの好きなことをやる、あるいは、学科だけに限らず、むきになって山に登ってばかりいるとか、そういうようなタイプがあったのに、いまは何でも目先の功利だけで考えるようになってきた。現に中学や高校での、科目の選び方とか重点の置き方とかがすべて入試中心のようになってしまっている。ですから入学試験というものは、理想的にいうなら、3月の入試の直前、その年の1月、あるいは前の年の12月ごろに、ことしは数学と英語で私のところは入試する、ことしは国語と何をやる、とはじめて発表するぐらいの大判断をやらないといかん、旧制の高等学校ではある程度そういうことが行なわれたのです。それくらいのことをやらないと、とても弊害の一掃はできないと思います。

太田 だからぼくは問題は大学だと思います。一つの大学でなくても学部ごとでもいいのですけれども、自分のところは2科目だけで入学試験をやるとか、そういういろいろなパラエティーを持った大学があつていいので、みんな主要4科目とか5科目とか、何でもやる

というようなことになっているからたいへんなことになっちゃう。もう一つは、いま入学試験を統一してやるというような案が検討されているらしいけれども、それはminimum requirementというような、高校卒業資格認定試験みたいなやさしいものにして、あと各大学でほんとうに自分のところで、生徒ができないと困るような科目を2つか3つにしほって試験する。それはいろいろな大学の性質に応じてパラエティーを持たせるというふうにでもすると、入学試験はもうちょっとよくなるのではないかという気がします。

朱牟田 私も東大の入学試験の責任者だったころ、各科の出題者に集まっていただくようなときに何度もかいたことがあるのですが、おれの科目で差をつけてやろうというふうに思わないでくれ、あらゆる科目が自分の科目でこそ差をつけてやろうと思うから意地の悪い問題の競争みたいになる。おれの科目はある程度できればいいんだという気持で問題をつくってくれといったものです。入試が高校教育、ひいては中学教育を左右しているということは動かせない事実です。ですからきょうそれの細部に入っていくには問題が大きすぎるけれども、それの大改改善を望みたいということだけは力説する必要がある。太田さん、E L E Cの会員諸君に何かひとつ希望を与えるような発言をして下さい。

ELEC と英語教育の方向

太田 E L E Cが今までとてきた英語教育の改善の方策、特に先ほどいった Oral Approach のいき方はぼくはいまでも正しいと思う。現在いろいろな英語教育理論が出てきて、多少考え方を直さなければいけない点もあるかもしれません。たとえば、単に繰り返してやって、習慣を形成することだけではなくて、ある程度説明を与えて知的に理解させるという作業も、ある段階では必要だろうと思いますけれども、大体の方向としては正しいと思います。

ただ、E L E Cが今まで考えていたのは、現行制度のもとでの改革であって、制度そのものを変えるかどうかということについては今までいってなかったわけです。最初にいったように、基礎的学力をちゃんとして、その上に大学教育を築くということになると、初めから非常にしほった形の専門家を養成するような形の制度の改革ということはちょっとぐあい悪いと思うのです。つまり、かなり幅の広い裾野をつくっておかないと、ほんとうにできる人間が必要な数だけ出てこない。

それから in-service training とかいうことは、依然

として必要だと思うのです。それにもう一つだけつけ加えたいことは、日本の外国语教育なり英語教育というのは、明治のころは外国のものを輸入するためにあったのです。したがって本を読むということが非常に大事だった。いまでもその重要性は失われていないと思いますけれども、同時にこれからは輸出するという役割を非常に必要とすると思うし、international communicationのための手段として英語があると思うので、輸出のための英語の能力ということをもっと考えなければいけない。平泉試案は、そういうことのできる人間をもっとたくさんつくらなければいけないというそのねらいは正しいと思うのですが、方法については若干異議がある。

それから言語というのは、文化・社会と密接な関係があるから、英語はその土壤になっていた、イギリスとかアメリカとかいうところの文化・社会と関係があるわけですけれども、いまいったような意味でもっと広い世界的な輸出のための道具ということになると、一般的の英語教育でこまかい英米の風物というようなことに、あまり熱を入れるのは考え方ではないか。英語がもっと広い役割を持った言語であるという観点を忘れてはいけないと思う。

朱牟田 やはり当面の役に立つ、立たない、ということにはあまりとらわれないで、オーソドックスなものを教えるようにということは、教師として一番正しい姿だと思います。昔、莊子が「無用之用」ということを説いたが、そういう考え方は時代が変わっても必要だと思うのです。

英語教師のあり方

平野 平泉・渡部論争に戻りますと、私は大体渡部さんの現状肯定説には賛成じゃないのです。ただあの人の意のあるところをくむなら、日本の英語教師にもっと自信を持たせたいということだと思います。周囲からさんざんたたかれて、自信喪失状態になっている日本の英語教師に自信を持たせたいというのが渡部氏の本意でしょう。たしかに日本の英語教師というのは、社会から過大的期待をかけられて同情すべき面があります。人間教育こそ英語教師の本務だ、国語教育も英語教師のつとめだとそれこそありとあらゆることが英語教師にかかる。英語教育の本来の役目でないものまで背負い込んで非常に苦労をしている。

前に私は、英語教育というのは人間教育ではないといって物議をかもしたことがあります。私自身、たとえば教室で私語をしている学生がいたりするとしきりつける

が、だからといって英語教育は人間としてのしつけの教育であるというふうには少しも思わないのです。人間の集団を相手にする限り自然になんらかの影響を与えないわけにいきませんが、そういう人間的影響力というものを英語教育の本質だとは思わないのです。英語教育というのは基礎学力をたたき込む教育だと思います。ぼくは英語というのは本来的に技術だと思うし、発音の訓練とか文法構造とかそういうことをたたき込むことに徹して、それに生きがいを感じるようにならなければ英語教師というのはつとまらないのではないかという気がします。英語教育をやるのは教養のためだとか、文学とか人生に目を開かせるためだと主張するのは、何か英語教育の本質でないものを隠れみのに使っているような感じがして仕方がないのです。

朱牟田 そういう発想はおっしゃるとおり多分に隠れみのというか擬態なんですね。

太田 入学試験だってまんざら悪いことばかりではないんです。あれは非常にたんねんに理解するのには役に立っているのではないかということをいってた人がいます。そういうふうに議論してくれれば大抵のことはいい面も持っていると思うのです。それで自信を持てというふうに必ずしもならないと思う。

平野 渡部さんの考えは現状を変えるという前提に立ってないでしょう。現状でより効果をあげるために、教師は自信を持つにこしたことはないという考え方でしょう。現場の先生がすっかり自信をなくしてしまったら、それこそどうにもなりませんからね。自信を持つことは必要ですけれど、自分は教養のため、あるいは人生教育のためにやっているのだという信念だけでやられても困るのではないか。たとえば教室でもっぱら文学とか人生談義だけをやって、それで満足して帰ってくるというのでは英語教師としてある意味で失格だと思います。

朱牟田 中・高は知らないが、大学の教養課程の英語の先生というのは、大部分が世をしのぶかりの姿で英語の教師なのであって、おれはなにも英語の教師なんかで一生終わるつもりはないのだ。ほんとうをいえば文学を研究したいのだ、翻訳をしたいのだ、ただそういうポストにつけてくれないから仕方なくやっているという人が多いと思います。その点でいくと中・高の先生のほうがまだしも純粋な英語の先生かもしれない。しかしそれだけに、外から何かいわれるすぐ気になるという傾向も、中・高の先生方にあるかもしれない。大学の英語の先生はそういうことをいわれても、おれの問題じゃないという顔している人が大部分です。

(p. 39 へづく)

中学校及び高等学校における 英語教育の改善について

1. 中学校及び高等学校における英語教育改善の基本方向

最近における国際交流の急速な進展の中にあって、我が国が今後諸外国との相互理解を深めていくためには、国民のできるだけ多くの者が、国際語の一つである英語を理解し使用する能力をもつことが必要であるとされてきている。

これから英語教育は、このことを配慮しつつ広く振興されることが望ましいが、学校における英語教育の改善に当たっては、学校教育が人間として調和のとれた育成を目指すことを基本としていることから、学校教育全体の改善方向を踏まえ、他教科との密接な関連の下に取り進めが必要である。

特に中学校及び高等学校における英語教育は、生徒が将来必要に応じて英語その他の外国語をより深く学習できるための基礎を偏りなく習熟させるとともに、併せて広い視野と豊かな教養とを培う基盤ともなり得るよう一層の改善を図っていくべきである。

また、その教育内容や方法については、当初はできるだけ多くの生徒が学習する機会をもち、漸次生徒の能力・適性・進路等に応じて適切な学習ができるよう工夫するとともに、聞くこと、話すことの指導にも十分な配慮を加える必要がある。

2. 英語教育改善の方策

上記1に述べた方向に沿って英語教育の成果を高めていくためには、種々の面にわたっての具体的な改善方策を総合的に講ずる必要があるが、英語教育の在り方を含む教育内容の改善については、現在教育課程審議会において別途に検討が進められているので、本協力者会議では、主として条件整備の面に関して当面実施が急がれる施策を中心に以下のように取りまとめた。

(1) 英語担当教員の研修

英語教育の充実は、教員の英語能力と指導力向上に負うところが大きいことから、特に次のような施策を講ずることにより、教員研修の一層の充実を図ること。なお、研修内容の設定に際しては、英語を読み、書く能力とともに、聞き、話す能力も十分高められるよう留意すること。

ア 指導的立場にある教員を対象とする1か月程度の研修を実施すること。

イ 各都道府県が教員の英語能力と指導力向上を図るために研修を年次計画により実施できるよう援助すること。

ウ 各学校における校内研修が一層推進できる方途について指導助言すること。

エ 教員の内地留学を、特に大学院段階において、推進するとともに、英語教育関係団体の実施する教員研修への参加についても奨励を図ること。

オ 教員の英語能力と指導力を高めるための海外研修を国内研修との関連を保ちながら拡充強化すること。

(2) 視聴覚教材及び教育機器の整備

英語学習において視聴覚教材や教育機器の果たす役割は大きいものがあるので、学校において、その効果的利用を図るための研究や工夫が進められるようにするとともに、学校規模に即してテープ式録音機、ランゲージラボラトリー、ビデオテープレコーダー、オーバーヘッド投影機などの整備を計画的に推進すること。

(3) 指導上の工夫改善

英語が日本語と言語系統を全く異にしていることや、生徒の能力に著しい差を生ずる教科の一つであることなどから、指導に際しては、外国における指導法の単なる模倣に陥ることなく、生徒の能力・適性・興味関心等に応じた学習形態の工夫や指導法の開発が、学校において進められるような方途を講ずること。なお、この場合次の点についても十分配慮すること。

ア 学習指導要領の内容を改善して、生徒の実態に即してより弾力的に英語の指導ができるようにすること。

イ 教科書の内容については、題材や語いの選定に偏りがないようにするとともに、英語を聞き、話し、読み、書く能力の基礎を一層定着させるための精選を図ること。

ウ 生徒の自発的興味関心に基づいて英語の能力を伸ばせるよう、英会話クラブ、スピーチクラブ、英語劇クラブ、ベンバルクラブなど英語に関するクラブ活動の振興を図ること。

(4) 高等学校における英語科の設置

英語に対する素質・能力・志望等を有する生徒に対してより一層深く英語教育を施していくため、専門教育を主とする学科としての英語科をもつ高等学校が各都道府県に設置されるよう奨励するとともに、必要な条件整備

(p. 25 へつづく)



ルサンティマンの壁のなかから

—「平泉試案」論争にもの申す

TAMURA IZUMI

田 村 泉

私はE L E C のパネル・ディスカッション第2回にパネリストとして出場した。思うことの半分も発表できず申しわけないと思いながらその後の百家争鳴ともいえる諸氏のご意見に注意してきたが、結局自分の考え方の核は当時と変わることに気づいた。もちろん何人かのご意見に教えられ発展させられた部分もある。六百余枚のカード（川喜田次郎氏のK J 法まがいをやってみた）から無理に圧縮して次のようにまとめてみたが、勉強も足りず力も至らぬ私のよりどころは、「王様は裸だ」と自分の考えを率直に投げだす態度だけだ。英語教育の土台の一部を造っているつもりの叩き大工が、建築士の先生や棟梁の親方にもの申す直言のつもりである。

I 教員養成・現職教育

教員なくして教育はない。外国語を正しい姿勢で身につけた教員を養成するのが、何よりも先決ではないのか。

平泉試案の最大の欠陥は、教員養成・現職教育という外国語教育の最重要課題を入念に無視したことである。「改革方向の試案」という漠然たるいい方であるにせよ、政治家が提出してきた案が「金のかかる」ことに関してはこれほどまでに消極的であることは、大いに特徴的である。平泉氏が教員養成関係で公表した意見は、私が知る限りでは次のようなものである。

a) 「先生方ご自身が、昔の教育の結果で会話は苦手という人が多く、生徒にも従って教えてもらえない」が「何といっても語学の専門家の先生方のことではないか。『高校生でも、3ヶ月もアメリカに行けば』かなりしゃべれるようになるだろうと小川芳男先生も保障しておられるのであれば、先生方の問題というのは、文部省の努力次第で、おいおい解決のできることである。」（『諸君！』5月号）

b) 「英語の先生の再訓練からまず始めてよい。外国人教師の導入を強化するのも大事なことである。」（『諸君！』7月号）

c) 「いま日本の教育設備のなかで、ほんとうにやろうと思ったら、できるお金もあれば、施設もあれば人材もある。外国人をもっと大量に使ってもよい。」（『諸君！』8月号）

平泉試案は、本来英語教員の大量淘汰を暗示する案だった。それが年月をかけた自然淘汰であろうと、教員は現在よりも大幅に減る筈だ。その分、一人当たりにかけられる金は増やせる筈だ。きっと氏は、口ではいわないだけで、そういう考え方を含んでいるのだろう。いくらなんでも3ヶ月かそこら教員を海外にやれば、充分な運用能力や国際性を身につけて帰ってくるなどと氏が考えている筈がない。ヨーロッパのある国々でやっているような、外国语教員全員の少なくとも1年間の海外研修派遣とか、大量の外国人教師の導入とか、その他現在では考えもつかないような金のかかる手段を講じても、本当はまだ足りないのが外国语の修行だということは、氏自身も随所で暗示している。それなのにa)とかc)とかといういい方になるのは、おそらく現実に妥協せざるを得ない政治家の、仲間向けの遁辞あるいは腹芸だろう。

だが私は、政治家としての誠意があればもっと理想を見据えると同時に、現実の困難も率直に語るべきだと思う。つまり、教育はこれだけ金がかかるのだということを、はっきりいべきなのだ。次のIIともかかわりのあることだが、ここでは教員養成についての理想方向の私案をのべる。棒ほど頗って針ほど叶うというが、大事なことは量ばかりか質の問題もある。「理想」の「方向」というゆえんである。

1) 外国語教員資格は、その外国语の四技能の壁を一応乗りこえた段階まで訓練を受けた者に与える。（中・高・大すべてを通して、この資格のある人は現在寥々たるものだろうと思う。私自身はまず失格である。）

2) Army method のような total immersion を組織的に実施する。言葉の修行のためには必ずしも外国に行く必要はないが、なんといってもその土地を踏むことはプラスである。相当長期の海外研修も考える。

3) そのためにはまず、大学の教員養成施設を、長期

計画で改革充実する。

4) 教員の現職教育として、海外研修、sabbatical year のような制度を大いにとり入れる。(現在その種の encouragement はゼロに近い。)

* * *

試案では、高校の英語専攻コースの生徒に対して猛訓練を施すべしといっているが、訓練にあたるのが今の私たちだとすれば、訳読と音声アレルギーしか教えられないことを保証する。平野敬一氏の比喩を借用すれば、「自動車の運転もできないのに自動車教習所の教官を勤め」ているのが私たちである。教員をしっかり養成すれば、その教員はたじろがずに「実用能力の潜在能力」を鍛えるであろう。コミュニケーションの価値と手応えを教えるであろう。

* * *

さて以上は、きれいごとの理想案だ。実をいって私はこんなことは何年かかっても日本ではできる筈のものではないと信じている。では何故いうか。理想の「方向」だからである。そして「教員」を育てることが教育のアルファでありオメガであるからだ。ラボなどに使う金があれば、この方向の一部になりと廻すべし。指導要領は教員のこの方向への自主研修を奨励せよ。政府・教育庁もせめて邪魔をすべきではない。

結論：政府は外国語教育にもっともっと金を使え。教員養成がその中心である。

II 日本型英語教育の問題点

イ. 外国語教育は日本語と格闘し、知的訓練に資することをその第一目的と考えていいか。
ロ. 日本人の英語能力の真の弱点はどこか。

イ. 外国語を学習するのはコミュニケーションのためである。顔をつき合わせて商取引きをするのもコミュニケーションなら、外国の文学古典を辞書を引き引き読むのもコミュニケーションだ。少なくとも私は、そういう広狭両義を含めた意味でコミュニケーションという言葉を使う。

いずれにせよ外国人と意思を疎通するために習得する言語媒体が外国語であって、それはコミュニケーションのためのツールといいきれる場合を広汎に含むと了解したほうがいい。そしてまた、いかなる外国語も、それを母国語とする人々にとっては必ずしも「言霊」の座であるという認識も必要である。

以上を枕にふっておいて、これまで渡部昇一氏が一貫してとって来られた立場を見よう。

「日本語と格闘することが外国語学習の目的」「潜在能力の開発をめざしての知的訓練であればよい」「だから英文和訳・和文英訳等従来の方法を変える必要はない」というものだ。私は2つの点でこの立場に反対する。

1) この姿勢は「先進文明攝取型」あるいは「受信型」を一步も出ない態度を肯定することになる。

氏の考え方の支点は別なところ（浅薄な英語つかいの否定）にあると思うが、私は従来の方法は Tongue-tied (*Newsweek*, June 9) はおろか、今後「発信型」「交流型」の青年の育成をはばむ姿勢だと信ずるので反対だ。読むにせよ、聞くにせよ、書くにせよ、せっかく生きている外国語を今わが国のように、息の根をとめ、干物にしてとり扱っていい筈がない。知的訓練のためというのなら是非現代語でなくラテン語にしていただきたい。

2) 次に、日本語を援用することは、外国語教育の過程で非常に有効な手段の一つであることは今や定説であろう。しかし外国語教育の目的が日本語を修行することであってはならない。原則的にはなるべく日本語と構造的に対比をさせない方法を「多読」および「オーラル・ドリル」面でもっと鍛える技術を開発していくべきであり（中級以上）英文和訳をふんだんに援用する「精読」を、週一時間程度に減らすカリキュラム（中級以上）を将来目ざすべきである。なお、発音記号、文法ははじめ導入するのがよいと思う。

渡部氏は「コミュニケーション=日常会話」という主張を仮装敵として、大いに戦われたが、その次元の考え方は *Japan Times* の投書欄を今年の1、2月頃にぎわした「日本人の英語」論争で外国人の意見として見かけたぐらいではないかと思う。

ロ. 四技能のうち何がいちばん難かしいかとか、大切かとかいうのは、原理的には恐らく愚かな質問だと思うが、我々現代の日本人の場合、その解答が出るように私は思う。それは「聞くこと」と「読むこと」だ。このふたつが最も難しく、現在最も大切だ。

人の「話す」「書く」という kinetic energy の量はその人の「聴く」「読む」という potential energy の量に正比例するというのが、ちょっと自信はないが私の仮説である。（ついでに自信のない仮説をもうひとついえば、外国語の「音読」は私の分類では「話す」技能のうちにはいる。）

「話す」「書く」はその根っこさえあれば、時間をかけねばなんとかなる。特に「話す」ほうは nonverbal な手段を大いに援用する手がある。しかし「聴く」というのはたいへんなことなのだ。相当長期の海外在住経験を

の他があって、耳の壁を乗りこえた人はいい。日本にいる者はよほどの修行をしなければFENのニュースも手応えをもっては聴きとれないに違いない。私にはこれ以上いえない。英語のsound barrierをつき破ってないからである。恐らく日本の英語教員の殆どが、その点一応のachievementにまで達していないのだろう。外国语の教員として、こういう人たちの集団が、どの他の国にあるのだろうか、知りたく思う。

「読む」ことが、今の日本ではまだ実になされていない。相当量の読書をして、語い、語法のたくわえをかなり持たなければ、聴く力も育たないものだ。音声と語い、語法が相補的に理解を助けていることを自覚できるまでの修行は、なみたいていのことではあるまい。

私が以上のこというのは、従来の英語教育が、低次の「話す」「書く」コミュニケーションしか行えない段階までしか、「聴く」「読む」ポテンシャルを身につけ得なかつたと理解しているからである。

平泉試案は、それではいけない、高度の「聴く」「読む」能力を育てなければ眞のコミュニケーションの役に立たぬ、(経済・外交上、みっともなく不利で困る。)そしてそういう能力はごく少数しか育て得ないのだから、早期から選択制を強化せよと提案したのだ。そして従来の訳読授業では、高次の「聴く」「読む」は決して育たないと強調したのだ。私は発想そのものとしては(カッコ内を除いて)これが正しいと思う。

一方渡部氏は、従来の方法でも素質のよい者は、そして海外に留学のできるエリートは高次の「聴く」「読む」まで行けるのだ、しかも国語の授業のほかに英語の授業のなかでも、日本語に対する愛情を教わって「日本語のこころ」を失わない人材が育つのだということを、ご自分を最適の素材として証明されたのだ。しかし大部分の国民に対しては、高度の「聴く」「読む」は無理だから、暗号解読の英語で知的訓練だけすればいい。口頭訓練などは必要ないから(とは言っておられないがそう聞こえる)話すことは下手であたりまえ、決してルサンティマンを心に抱かず、道をきかれたら文章で書いて教えろ(とは言っておられないが、そう聞こえなくもない)という立場だ。

こうして高度の「聴く」「読む」というコミュニケーションを基準にして英語教育を考えると、ごく少数にしかその能力は開発育成できないものという結果の見方は、案外お2人とも同じかもしれない。後段(IV.1)で紹介する永井道雄氏にしても、結果の読みは似たものだ。ただ問題は、高度コミュニケーションの能力に達しない圧倒的多数と目される国民への教育的配慮をどうす

るかという点の考え方の差だけにしばられてくるのではなかろうか。そこを平泉氏はスッパリ切り捨てて無駄な負担を軽減してやれといったためにこの騒ぎになったのだ。

私はこの項はここでやめたい。ただ、私を含めて、四技能の壁をのりこえてない教員が、その壁の内側の暗闇で、壁の外のこと「について」生徒たちに教えている図が悲しいのだ。もちろん壁はどんな大学者にとっても永遠になくなる筈のものではない。それに私たちの周囲の壁のなかには、渡部氏のいわゆるルサンティマンという自ら作った壁も一段と高く厚くある。しかし「聴くこと」「読むこと」の壁のくずし方は、教員養成段階でもう少し鍛えておくべきものだし、現職教員にももう少しそのための便宜を与えるべきものだ。さすがの渡部氏も『諸君!』9月号で「一学校に1人ぐらいは(特に先生の勉強のために)外人の先生がいてもらったらよかったと思う」というようになられたではないか。

結論: 外国語を習うのはコミュニケーションのためだ。教員は「聴く」「読む」ことの意義を意識すべきだ。

III 大学入試と英語

- イ. 大学入試から英語をはずして、問題が解決の方に向に動くか。
- ロ. 現状を改善する方向を考える方が本筋ではないのか。

イ. 試案が大学入試から英語をはずすことを主張するのは、必ずしも入試問題の程度が高すぎたり不適当であるからではないと思う。仮に今の入試問題を、平泉氏が最善と考えるものに改善しうるとしても、氏の結論は変わらまい。日本の英語の質を高めるためには、モーティヴェイションの高い、しかもよりはるかに少数の学生を選んで訓練する必要があるというのが氏の狙いの根本だからだ。さて、大学入試から英語を抜いてみる。多くの者は、英語学習の意欲を失うだろう。しかしそれでも、国際コミュニケーション(広義)に興味をもつという人だけが高校の英語コースに入ってきて、厳しいけれど意味のある訓練を受けるだろう。その数も上に行くにつれてますます減ってきて、結局眞の英語つかいが600万人もできれば申し分ない、という狙いだと思う。私は2つの疑問を感じる。

1) 一つは渡部氏も指摘されている、「英語コース」のエリート化である。今の日本の社会の体質では、恐らくこのコースはエリートコースになる。平泉氏自身、こ

の構想の発想は次のようなものだった筈だ。

「いま国会のひな壇に並んでいる人達は…閣議に出てる人たちは英語が読めるでしょうか」（E L E C バネルディスカッション第1回）「いまわが国のどの一流会社の重役にお会いになっても英語のできる人がいない…。（国際会議で）通訳が入らなければならないのはわが国の閣僚だけです」（同上・第2回）

つまり氏は、エリート・エギュゼキュティヴが英語が如意で具合が悪いというところから発想したことを実にすなおに言ってしまったのだ。とにかく大学から英語入試をはずした結果、高校英語コースへの入学競争が過熱するのでは問題の解決にはならない。

2) 今はまだ「手術」の時ではない。なにぶん大学入試は、不幸なことに今や日本の教育の心臓みたいなものになってしまっているのだ。焦っては危険が大きい。いずれ有効な手術ができるような体力を整えながら様子を見て行くべき段階だと思う。それより、体質改善の方向にうつ手はまだある筈だ。

口。大学入試の英語に、ヒアリング・ディクテーションといった直接音声を聞いて内容をつかむ問題を20~30%は加えることを原則としてほしい。これは各大学に対するお願いである。行政当局はその経済的裏づけをなんらかの形で援助していただきたい。

現に放送施設を使ってその種の試験を行なっている大学も少数ながらあり、傾向としては恐らく増加の方向だろう。しかし良き刺激によるスピードアップは必要だ。

平泉試案は、英語学習の motivation のほんもの化を図るために大学入試の外を通ろうという。私は大学入試を英語教育の体質改善の刺激にすべきだというのだ。但し入試を人質にとって音声教育を強要するようなやり方をするべきではない。高校に対する真剣な指導を含めて、関係当局は早急にその方向に、研究と準備を発動すべきものである。

結論：各大学は入試に、放送による音声問題を導入すべし。

IV その他

1. 5%, 600万人の英語の実用能力者

試案のこの数字をどう読むかということだが、その前に、永井道雄氏が平泉試案の出る半年ほど前に言った言葉を紹介したい。私はこの考え方非常に感銘したのである。

「何万人か何十万人か知りませんが、ほんとうに英語のできる人、又は中国語、朝鮮語等のできる人がいる。そのすそ野として国民全体が外国語に一種のなじみをも

っている。その下敷きとして日本人が日本語を非常にだいじにしている、というのが理想です。」（『現代英語教育』48年12月号）

この意見の裏には、全国民に中等学校段階で英・露・仏・西・中・朝鮮語などのなかからどれか一つを選択必修の形で履習させるという永井氏の考えがある。

私の印象では、平泉氏には目先きを急いで間に合わせなければ、という焦りがあり、こういう永井氏のような悠然たる大きさがない。

永井氏の理想的であり、将来ともそういう形が実現するものかどうかわからない。しかし、大きな戦略目標を正しい方向に据え、その原点をつねにふまえて施策するのが国家百年の大計というものであるとすれば、私には永井氏の考え方方が、その正しい目標提示だと思える。

2. 指導要領

昨年度の「英語教育改善懇談会」の席上でも各英語教育団体の代表者が現行指導要領の罪積をこもごも指摘していた。実際、がんじがらめという感じで教材を規制し、語いを指定し、そうして作らせた教科書の採択にまで広域採択（中学）といった枠をはめているのが指導要領である。

やはり文部省で出している「学習指導要領解説」という冊子をみると、そこにあるのは官僚的な員数あわせと、どこかに脅迫を秘めた権威主義と、読む者の健康に影響を与えそうな文体とである。こういうものの支配下に「ことば」を教えなければならないとは我ながらみじめな思ひだ。高校ではしかし、お蔭さまでこういうものの存在を殆ど誰もが無視し、「言語活動」などといふ言葉も気にしなくてすんでいるが、どれもこれも同じ、画一的で個性のない「リーダー」を見ると、指導要領や教科書Gメンの恐ろしさをひしひしと感じてくる。

今回の「試案」論議では、たしかに議論が百出したが、渡部・平泉論争がその「高踏的」なトーンで終始リードした感がある。これこそ質ともにこのtournamentを代表する一騎うちであり、教えられることも多かったが、そのやりとりのなかには、大学入試のように表に見える問題点の指摘はあったが、影の帝王「指導要領」への言及は片言隻句といえどもなかった。このお2人の論議の質からいって、これはこれでもいいかもしれない。ただ、この華麗な論戦に影響されて、あるいはけおされて、もっと我々に身近な「指導法」や「指導内容」の話しあいがあるでしめてしまったかにみえる。しかし英語教育雑誌には、そういう地道な立場からの意見が数多く寄せられ、現行指導要領への言及もいくつかあった。私はこの際、指導要領に対してもっと話が出てくるべ

きだと思っている。

3. 協力者会議の改善案

小川芳男氏を座長とする「英語教育改善調査研究協力者会議」が文部大臣の諮問に答えて、真に総合的な改善案を提出した。(6月19日付)

私は大筋においてこの案の方向に賛成だ。1. の「基本方向」はいちいちもっともだし、2. の「改善の方策」ではトップに教員の研修をとりあげたのは我が意を得ているし、また指導要領をおだやかに批判したのも嬉しい。そして最後に付帯意見として教員養成に触れたのは正しいと思う。

一方、ラボをもっと作れというくだり、また教員養成のなかで「英会話」という言葉を使っているところは私は反対だ。ラボなど作るより、生徒1人に1台ずつテープレコーダーを在学期間中無料貸与した方がいいし、英語の「会話」というのは、英語教育の結果発生する現象にすぎず、クォーテーション・マークのついたお仕着せの「会話文」を暗記させたりして「教える」べきものではないと私は思うからだ。

そしてこの案の「目玉」商品は、2(4)の高校英語科コース新設のサジェスチョンだろう。私にはこの問題の是非は、よくわからない。方向次第だと思うので、慎重にお願いしたい。平泉試案の影響のような気もするが、それはともかくとして、この問題の impact は大きいだろう。

おわりに 平泉試案が日本の英語教育改善のために警鐘を鳴らした功績は大きいという意味のことをいう人が

(p.20からのつづき)

を図っていくための次のような措置を検討すること。
ア 英語科の教育課程において実習的な教育内容の占める時間数その他を勘案して、教職員定数について特別の措置を講ずること。
イ 英語の指導、特に聞くこと、話すことの指導の効果を一層高めるため、必要に応じて外国人による指導を受けることができるような措置を講ずること。

なお、上記の外国人が、英語担当教員の研修会において活用されるようなことについても配慮すること。
ウ 設備等については、専門教育を主とする学科としてふさわしいものが十分整備できるような措置を講ずること。

附帯意見（大学において配慮すべき改善事項）

(1) 教員養成における改善

ある。が、私には政治家がかりそめにも「案」と銘うって世に問うたものとしては、政策面の具体性を基本的に欠いたこの試案は、価値も低く、また危険なものとしか見えない。

一方英語教育改善の提言は、もっと地道な手応えのある立場から、数多くなされているのだ。前述「協力者会議」の案や、「英語教育改善懇談会」の提唱などを問題にしないで、この手のものにかかるらわるのはもうやめた方がよい。

この案を危険というのは、1人か2人の政治家のうわざった思いつきが、実現してしまうおそれが、世の中にはあるからである。嘗て東京都に突如学校群制度が強行され、教育が更に荒廃させられたことを私は思ひだす。警戒するにこしたことはない。

試案には「国民」という言葉が13回出てくるが、そんなに国民の立場で考えているのなら平泉氏は外国语教員の学習環境を整備向上させるための、現実的で地道な努力を今後続けるべきである。また例の「試案」とはいい条、実は隨筆でしかないようなものを今後書く時は、自民党何とか委員会などという肩書きはなしでお願いしたい。とにかく、この issue を通じて氏には評論家としての発言しかない。公約をせよとまではいわないが、少なくとも自身の政治家としての努力の方向を表現するぐらいの責任のある立場はとるべきだろう。

注] ルサンティマン：怨念、恨み。何年やっても英語がしゃべれるようにならないことのルサンティマンが平泉試案を産んだのだといって、渡部昇一氏は『諸君!』4月号で試案を批判した。

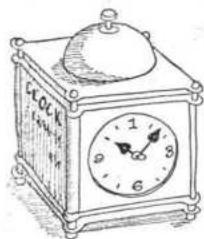
(都立駒場高校教諭)

英語担当教員を養成する大学の課程における教育の内容や方法について、英語を聞き、話し、読み、書く能力が高く、かつ指導力の優れた教員が養成できるよう配慮がなされ、このため、英会話及び英作文に係る授業科目について時間数を増加することなど、授業科目の内容や指導方法について一層の改善が図られることが望ましい。

(2) 大学入学者選抜における改善

大学入学者選抜学力検査における英語の出題内容が、高等学校の英語教育に大きな影響を与えることにかんがみ、その出題に当たっては、単に選抜上の観点だけではなく、高等学校における英語教育の正常な発展を図るという観点からも配慮されることが望ましい。

(日本国際教育協会理事長 小川芳男民を座長とする英語教育改善調査研究協力者会議が昭和50年6月19日永井文部大臣宛提出した報告書。)



基礎語彙について (5)

HATTORI SHIRO

服 部 四 郎

6.6.2.2. Thorndike 所載の Lorge の magazine count により筆者の算出した頻度順第200位までの英語の単語を、『第3次基礎語彙調査表』および『アジア・アフリカ言語調査票、上』と比較しよう。各単語に関し、次の順序で示す。

[1] 頻度順位

[2] 頻度数

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
1	236472	the	—	—
2	162323	be	{453<ある, いる> {446-2<だ>}	A499<だ>
3	148035	I	413	A227
4	138672	and	442	{B497<および> {C976<そして>}
5	131119	a	—	—
6	115358	to	436	C997
7	112601	of	443	C996
8	101958	he	417	A229
9	75253	in	439	C986
10	68035	have	{454-1<持っている> {457-3<(have to)>}	A316<持つ>
11	65670	she	417-1	A230
12	62131	it	—	A250<それ>!!
13	61034	that	{421[-1, 3, 4] {447-3<…と>}	A251<あれ>
14	56157	you	{415 {416[-1, 2]}	{A228<あなた> {B232<あなたたち>}
15	42892	{no {not}	{457-5<いいえ> {453-1<ない> 447	{A493<いいえ> {A426<無い> {A500<でない>}
16	41563	they	418	{B233<かれら> {B234<かのじょら>}
17	39363	for	457(for the sake of)	{C979<なぜなら> {C988<のために>}
18	32903	with	{441<と> {446<で>}	B498<とともに>
19	30693	as	457-1(as...as)	—
20	30538	we	414	B231
21	30224	on	440 at, on	(B496 at)
22	29177	do	{233<する> {217<作る>}	A419
23	26250	at	440	B496
24	25862	will	(452<たい>)	—

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
25	23704	but	449	C 980
26	22293	go	167	A 413
27	20148	{many much}	411 411	A 471
28	20134	can	454	A 423
29	18823	this	420	A 249
30	17971	ask	{186<尋ねる> 195-1<頼む>}	{C 766<問う> {C 851<頼む>}}
31	17799	all	407	{A 194<全部,すべて> {B 473<みな>}}
32	17569	one	394	{A 179 (A 226(person, man, one))
33	17370	say	185	A 280
34	16737	from	438	C 998
35	15393	there	423	A 258
36	14851	or	—	C 981
37	14775	when	429	{A 176<いつ> {C 982<ときに>}}
38	14506	if	435	B 491
39	13649	out	(360 outside)	A 271 (out, outside, exterior)
40	12696	come	168	A 412
41	12632	make	{217<作る>> 450<させる>}	A 362<作る>
42	12461	what	425	A 253
43	11851	know	242	A 421
44	11718	up	357	A 273
45	11712	so	421-5, 6, 7	C 978<それゆえ>
46	11454	by	{355-1<そばで> 446 {<で> (by means of) 406-3<ずっと>}	{C 990<によって> {C 991<で>}}
47	11275	little	{327<小さい> 412<少し>}	A 428<小さい>
48	11183	which	{426<どれ> 426-1<どの>}	{A 252<どれ> {C 955<どの>}}
49	11085	get	{192-1<手に入れる> (110(get up))	B 371<得る> (A 296(get angry) B 327(get up))
50	10969	man	{146<人間> 147<男>}	A 226<ひと>
51	10930	who	424	A 237<だれ>
52	10208	then	—	C 977<それから, そこで>
53	9991	see	57	A 275
54	9918	about	—	{C 989<について> {C 994<ほど, くらい>}}
55	9538	take	{197<取る> 199(take hold of) 65(take off) 215-5(take out)}	{B 357(take off) {B 368(take rest) C 872(take one's place)}
56	9499	like	{246<好む> 457-1, 2<ほど, のような> 455-1<似ている> (421-6, 7, 5(like that, this))	{B 333<好む> {C 953<こんな>}}

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
57	9382	think	241	{B406<かんがえる> A420<おもう>}
58	9326	good	344	A485
59	9231	into	—	—
60	9215	look	57	A275
61	8559	time	{406<回> 406-1<倍>}	{A178<時間> B198<回>}
62	7628	want	452	C899
63	7601	tell	(185 say)	—
64	7565	now	382	A175
65	7520	over	172-1(go over)	(A259 over there)
66	7382	may	(454 “できる”)	—
67	7267	only	446-1	C995
68	7109	other	456	B236
69	6864	year	{392 392-1<年齢>}	{A167 C696<歳>}
70	6757	than	445	C1000
71	6587	back	{40<背中> 355<うしろ>}	{B 21<背中> A269<うしろ>}
72	6532	any	—	—
73	6429	thing	325-4	A 81 « もの »
74	6347	just	431-6	C959
75	6295	well	{111-1<井戸> 129-1<丈夫な>}	B115 « 井戸 »
76	5958	two	395	{A180 C689(two people)}
77	5786	eye	3	A 5
78	5761	some	431	{B195 C660(some day)}
79	5608	give	192	A418
80	5590	find	213	B392
81	5559	home	—	A112 house, home
82	5552	after	384 after, afterwards	(C662 afterwards)
83	5534	down	358	A274
84	5498	way	178 path, way	A132 way, road
85	5362	long	328	A455
86	5201	old	{151<年とった> 347<古い>}	{B466<年をとった> A468<古い> C699<年寄り>}
87	5197	how	424	B256
88	5165	leave	—	—
89	5154	first	406-4	C685
90	5129	love	246 like, love	C778
91	5047	head	1	A 1
92	5011	before	{354(空間) 383(時間)}	{C661<以前> C983<より前に>}
93	4983	woman	148	(A225 female)
94	4925	where	428	{A260<どこ> B264<どちら>}
95	4914	too	444	(C966 also)
96	4804	life	(126 alive)	C516 « 命 »

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
97	4630	very	431-1	—
98.	4577	seem	—	—
99	4549	day	{377<ひるま> 391<ひ>}	{A163<ひ>? C646<にち>}
100	4359	through	—	—
101	4307	live(ing)	{114<住む> 126 alive, live(ing)}	{A365<住む> B398<生きる>}
102	4302	must	457-3	—
103	4276	use	210-1	C850
104	4231	house	96	A112
105	4206	child	149	B208
106	4202	own	454-1《所有する》	—
107	4198	even	—	—
108	4125	here	{422 423-2<こちらへ>}	A257
109	4092	feel	—	C722 feeling
110	4058	girl	149-2, 4	(A207 daughter)
111	4053	continue	233-3	{C876<続く> C877<続ける>}
112	3993	mother	{153 153-3(mother in law)}	A203
113	3972	young	{150 149-3(young man)}	{B465 B209<動物の仔>}
114	3967	again	432	B490
115	3961	new	348	A467
116	3952	turn	{171 (171-1)turn around)	{C881<まわる> C882<向く>}
117	3902	face	22	B17
118	3896	why	428-2	A254
119	3874	right	{343<正しい> 361<右>}	{B487<正しい> A267<右>}
120	3857	Mr.	—	C708 Mister
121	3834	great	(326 big, large)	C944
122	3789	room	98-1	C574
123	3726	away	—	B263《あちら》
124	3679	because	448	C979
125	3651	Mrs.	—	C708
126	3649	place	{353-1<場所> 215 put, place}	B265《ところ》
127	3644	off	—	—
128	3610	page	—	—
129	3598	stand	111	A321
130	3575	try	—	—
131	3574	people	—	—
132	3533	call	{187 159-10(be called)}	B281
133	3517	last	{233-3<続く> 406-7<最後の>}	{C651 last month C657 last year}
134	3385	night	379	A171
135	3340	while	—	—

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
136	3334	hand	30	A 30
137	3323	every	{ 390(everyday) (407 all, every)	B164(everyday)
138	3285	always	385	B469
139	3256	keep	{ 211-1(keep safe) (233-3 continue)	C 788 «飼う»
140	3235	father	{ 152 153-2 father-in-law	A 202
141	3183	let	192-4 lend, let	{ C 842 let one come in C 898 let one (go)
142	3133	world	—	C 726
143	3115	begin	233-1	{ C 867 <始まる> C 868 <始める>
144	3100	talk	184 speak, talk	{ A 285 <話す> C 603 <話>
145	3089	money	—	A 117
146	3089	something	430-2	C 755 «なにか»
147	3054	should	—	—
148	3006	hear	59	A 277
149	2961	under	—	—
150	2960	until	437	C 999
151	2957	once	—	—
152	2896	put	215	A 408
153	2873	three	396	{ A 181 C 690 three people
154	2859	late	381	C 930
155	2850	business	—	B 116
156	2845	word	183 language, word	A 243 language, speech
157	2831	oh	—	—
158	2817	nothing	—	—
159	2803	without	—	C 992
160	2758	upon	—	—
161	2740	few	412	A 472
162	2720	work	164	{ B 116 <しごと> B 366 <働く>
163	2690	around	{ 363-1 (171-1(turn around))	C 984
164	2663	white	337	A 477
165	2651	anything	—	C 755 «なにか»
166	2646	ever	—	C 660 «いつか»
167	2619	each	(434-1 each other)	C 754 each one
168	2606	play	189	B 399
169	2591	another	—	—
170	2553	friend	159-6	A 218
171	2541	such	—	{ C 953 <こんな> C 954 <そんな>
172	2539	need	454-2	C 897
173	2511	door	98	B 111
174	2485	hour	—	A 178

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
175	2408	miss(M)	—	C 708
176	2396	moment	—	—
177	2387	light	{ 264 <光> 101-1 <火をつける> 266 <明るい> 410 <軽い>	{ B 436 <軽い> B 474 <明るい> A 476 <光>
178	2373	mean	—	(C 724 meaning)
179	2366	mind	249	{ A 244 <心> C 722 <きもち>
180	2356	still	—	C 967 <まだ>
181	2353	minute	—	C 648 <分>
182	2343	course	—	—
183	2338	arm	28	{ B 28 C 587 arms <武器>
184	2329	American	—	—
185	2321	next	384-1	C 665
186	2299	interest	—	(C 922 interesting)
187	2253	week	391-1	B 165
188	2247	marry	159-3	B 201 marriage
189	2216	wait	194	B 401
190	2207	start	233-1	—
191	2202	almost	—	—
192	2202	yes	457-4	A 492
193	2184	against	—	—
194	2143	smile	60 laugh, smile	(A 291 laugh)
195	2132	answer	186-1	{ C 709 <答> C 767 <答える>
196	2114	fact	—	—
197	2114	lady	—	—
198	2113	enough	—	—
199	2087	evening	378	B 170
200	2084	walk	173	A 316

6.6.2.2.1. 以上を概観すると、次の諸単語が、『調査表』に項目語として、『AA調査票』にAあるいはBとして、出ている。()に入れたのは、色々の点で多少とも問題のある単語。

(2,) 3, 4, 8, 13, 14, (15,) 16, 18, 20,
22, 23, 26, (27,) 28, 29, 31, 32, 33, 35,
37, 38, 40, 41, 42, 43, 44, 47, 48, 50,
51, 53, (55,) 56, (57,) 58, 60, (61,) 64, 68,
69, 71, 76, 77, 78, 79, 80, 83, (84,) 85,
86, 87, 91, 94, 99, 101, 104, 105, 108,
112, 113, 114, 115, 117, 119, 129, 132,
134, 136, 138, 140, (144,) 148, 152, 153,
161, 162, 164, 168, 173, 177, 179, 183,
189, 199, 200

計86語、すなわち全体の43%である。

次に、『調査表』に項目語として出でていて、『AA調査票』にCとして出でているかあるいは全然出でていないものは、次のようにある。

Cとして出でているものが次の16語。

6, 7, 9, (17,) 25, 30, 34, (46,) 62, 70,
(90,) 92, 116, 124, 150, 154

全く出でていないものが次の6語。

(21 on;) (82 after;) (93 woman;), (95 too;)
(156 word;) (194 smile)

以上『調査表』に項目語として出でているものは、総計108語、すなわち全体の54%で、日本語の場合の53%(本誌 No. 48, p. 30右, l. 9. ただし、日本語の場合は助詞・助動詞を除く)に近い。

次に、『AA調査票』にAあるいはBとして出でていて、『調査表』に非項目語として出でているかあるいは全く出でていないものは、次のようである。

非項目語として出でているものが次の11語。

10, 11, 49, 73, 75, 118, (126,) 170, 187,
(188,) 192

全く出でていないものが次の7語。

12 it; 39 out; 81 home; 123 away; 145
money; 155 business; 174 hour

ただし、『AA調査票』が「これ」「それ」「あれ」にそれぞれ this; it; that を当てているのは不適当で、「それ」には that を当てるべきで、「こちら」「そちら」「あちら」に対しそれぞれ this way; that way; away, that way としているのも away を除くべきであろう。

以上『AA調査票』にAあるいはBとして出でているものは総計104語、すなわち全体の52%である。

次に『調査表』に非項目語として出でているものうち、『AA調査票』にCとして出でているものは：

45, 67, 74, 89, 103, 111, 122, 133, (141,) 143, 146, 163, 172, 185, 195

の15語で、全く出でていないものは：

97 very; 102 must; 106 own; 110 girl; 190 start

の5語で、総計20語である。

『調査表』に全く出でないものは次のようである。

そのうち『AA調査票』にCとして出でているものは：

36, 52, 54, (96,) (109,) 120, (121,) 125, (139,) 142, 159, 165, 166, (167,) 171, 175, (178,) 180, 181

の19語で、後者にも、すなわち両者共通に、全く出でないものは：

1, 5, (19,) (24,) 59, 63, (65,) 66, 72, 88, 98, 100, 107, 127, 128, 130, 131, 135, (137,) 147, 149, 151, 157, 158, 160, 169, 176, 182, 184, (186,) 191, 193, 196, 197, 198

の35語である。

6.6.2.2.2. 両調査表の双方または一方に全く出でないものを、品詞別(6.6.2.1. 参照)にして示そう。

無標=両者に出ていないもの。

×=『AA調査票』にはCとして出でているもの。

✗=『AA調査票』にはAあるいはBとして出でているもの。

°=『調査表』には非項目語として出でているも

の。

：=『調査表』には項目語として出でているもの。

冠詞 1. the; 5. a

人称代名詞 ✗ 12. it

接続詞 135. while; × 36. or

前置詞 19. as; 59. into; 65. over; 100. through;
149. under; 160. upon; 193. against; ×54. about;
×159. without; 21. on; 82. after

助動詞、など 24. will; 66. may; 147. should;
°102. must

動詞 63. tell; 88. leave; 98. seem; 130. try;
×109 feel; ×139 keep; 178. mean; (*106. own『調査表』の454-1には《持っている》); °190. start; °194. smile

数量詞 72. any; 137. every; 158. nothing;
×165. anything; ×176. each

副詞 107. even; 127. off; 151. once; 191. almost;
198. enough; ×52. then; ×166. ever; ×180. still;
✗39. out; ✗123. away; °97. very; 95. too

形容詞 184. American; ×121. great

名詞 128. page; 131. people; 176. moment;
182. course; 186. interest; 196. fact; 197. lady;
×96. life; ×142. world; ×181. minute; ✗81. home;
✗145. money; ✗155. business; 174. hour; °110.
girl; 93. woman; 156. word

連体詞 169. another; ×120. Mr.; ×125. Mrs.;
×171. such; ×175. Miss

以上を概観すると、冠詞、助動詞、数量詞、などには、英語的で一般言語学的な基礎語彙調査表には出せないものが多く、前置詞などは調査表そのものが網の目を細かくしてないために出なかったものもあるが、概して言えば日本語の場合ほど興味ある結果は獲られなかったように思う。また§6.6.2.2.で扱った資料からは、文字言語的な偏りも、日本語の場合ほど明瞭には確認することができないよう思う。これらの諸点は、日本語と英語の違いの一部の現れであろう。そして、たとえば、本誌 No. 48, p. 31左の 1.9~1.23 に挙げた日本語の諸単語の中には、英語との対照的研究の興味ある話題となるものが少なくない。

7. 以上、我々の作った基礎語彙調査表と統計的調査による頻度順位表とを比較した結果、次のことが言えると思う。

(1) 統計的調査は、文字言語資料を用いるので、音声言語を十分反映しない面がある。英語の場合でも、音声言語では盛んに用いられる挨拶ことばや間投詞の頻度が高く出ない。日本語では両言語の差が英語の場合よりは大きい面があるので、上に検討した調査結果ではその傾向が一層著しく現れているのであろう。音声言語を研究するためには、文学作品の会話のテキストを資料とすること、実際の会話を多量に録音して資料とすること、などが考えられる。

日本語では、何を「単語」と認めるかによって、統計結果が多少変わってくるであろう。「てにをは」のような付属語は単語と認めて統計の際単位として取り扱っても、接辞や接合形式は単位として取扱わず別扱いにする、という立場もある。

(2) 我々が基礎的と見做す単語には、会話においてさえ高い頻度では現れないようと思われるものが少くないので、そういう単語に関しては、統計的調査は恐らく効果がないであろう。この種の単語の「基礎度」の調査には、主観的判断を援用する必要がある。

我々の調査表を作製した際に、そのような判断に頼った面が少なくない。

(3) これに反し、付属語の類は、一般に、統計的調査によると頻度が著しく高く出る。日本語では助詞等（「て」「に」「を」「は」が4つとも含まれる！）がそれで、英語では冠詞、前置詞、人称代名詞等の自立性の低い単語がそれである。これらに続いて頻度の高く出る品詞も自立性の高くなきものが多く、統計的調査は、各言語におけるこの種の単語を明らかにするために、効果的である。

(4) 「文法」と「語彙」を如何に区別すべきかが問題となるのが普通だが、私は「(活用・曲用語尾等の接合形式は言うに及ばず) 付属語はすべて文法に属する」と言ってきた。代名詞（人称、指示）、数詞は文法で記述されるのが普通だが、それらが（自立性が低い場合があり、かつ）頻度が高い点から見ても、これを「文法的」と見做すことができそうである。存在詞、否定詞、連体詞などもこの意味で「文法的」である。さらに、副詞、接続詞、間投詞なども、この見地から「文法的単語」と見做すことができそうである。また、これらの「品詞」に属する単語の数が少ないことも注意すべき点である。

そうすると、これらの諸単語を「語彙」従って「基礎語彙」に含ませないこともできる。従来「基礎語彙」と言うときには、頻度の高い自立語（上述の「文法的諸単語」の少なくとも一部）を含ませるのが普通であったが、これらを除外するのも一つの立場であると思われ

る。

(5) さらに興味があることは、頻度の極度に高い付属語の類は、その言語を「文法的に正しく」話すためには、絶対に必要だけれども、*Pidgin English* 的にブローカンに話すときに真先に省略される¹⁾、すなわち省略しても何とか意味が通ずるように話せるということである。これに反し、別の意味で頻度の高い挨拶ことばなどは、友交的対人関係を成立させるために重要である。戦時中米国で発達した外国语の*intensive course*のあるものがこれを重視したのは一つの見識であった。いわゆる「文法書」が会話熟達に役立たなかったのは、この種の形式を記述せず、かつ当然のことながら「基礎語彙」を示さなかったからであろう。外国语の*intensive course*の教科書は、これらの諸形式を適当に重んじ、かつ「文法」を適度に織り込んで行くものでなければならないと思う。

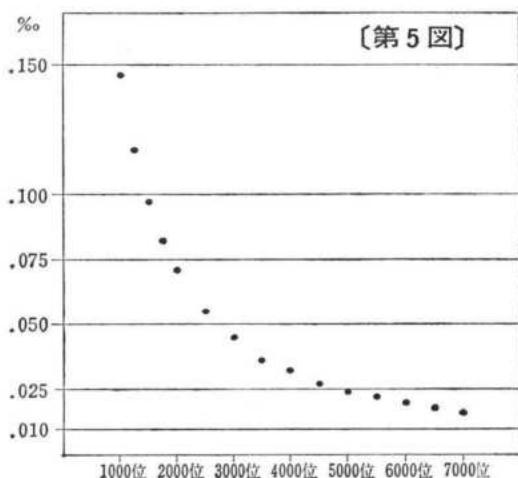
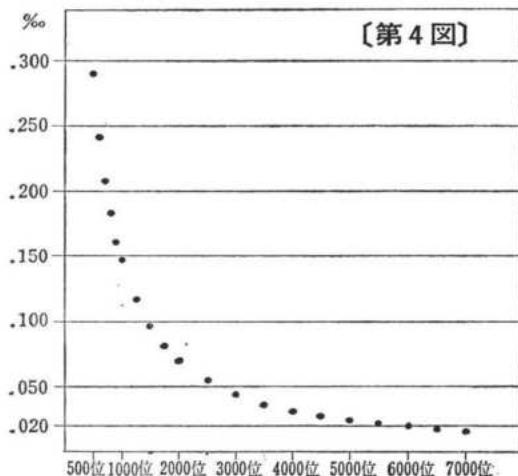
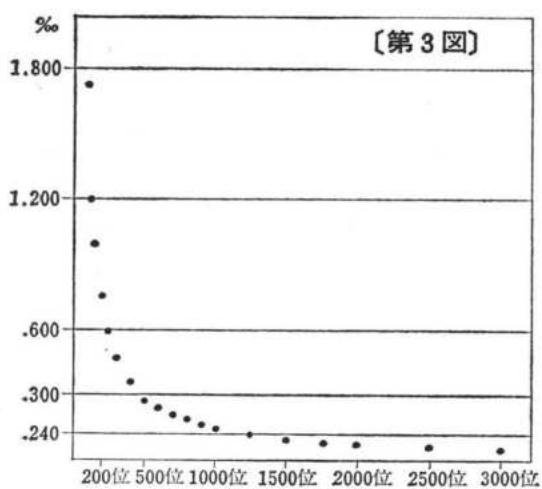
なお、『第3次基礎語彙調査表』の作製について多少説明を加えたい。この調査表は、学問の国際的協力のために、少し無理はあったが、*Swadesh* がその言語年代学的調査表に含ませている、あるいはかつて含ませていた単語を、全部、項目語として出してある。従って彼が前置詞等をも含ませているのにならって『第3次基礎語彙調査表』でもそれらを項目語として出したが、前置詞などの網の目を特に細かくすることはなかった。「基礎語彙統計学」的研究に使用するのが目的であるから、「基礎語彙」の上記のような狭い定義には合わない作製の仕方をすることになったわけである。

附 記

本論文の冒頭 (No. 46. p. 32) に記したように、「昭和44年9月7日に日本語教育学会において行なった講演のときのメモによって書き下ろす」とことにより始まったこの拙文は、書いて行くうちに敷衍に敷衍を重ねて、講演とは著しく違うものとなってしまった。一方、講演で話したことを書かないでしまったことも多少ある。そのうちの1つは次の事である。

本誌 No. 46, p. 36 の第1図に示したように、頻度数

1) 「遠心性失語症」(efferent aphasia)において、接続詞、前置詞、代名詞のような「文法的」単語が失われる (Roman Jakobson: Selected Writings II, p. 310) のは興味あることである。「文法」と「語彙」は、我々の脳髄においてもその異なる機能に支配されているのであろう。失語症のさらに精密な研究が望まれる。



と頻度順位とのグラフを作ると、線は急に下降してきて、急なカーブを描きながら水平に近づき、500位、1000位ではほとんど水平線のように見える。ところが、第4図のように頻度数の差を拡大して示すと、ゆるやかではあるが、同じような曲線が現れるのは興味あることである。

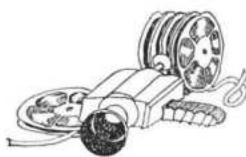
本稿では、さらに第3図と第5図を作製した。頻度順位は、『現代雑誌の九十種の用語用字』第一分冊のp. 185以下の第2表に、助詞、助動詞のそれを割り込ませたもので、頻度の数字は、900位以下のものには、前後を参照しつつ推定的に算出したものがある。それらの数字は次のようである。

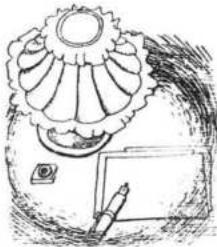
順位	頻度(%)	順位	頻度(%)
100	1.728	1500	.097
125	1.221	1750	.082
150	.994	2000	.071
200	.753	2500	.055
250	.591	3000	.045
300	.470	3500	.036
400	.354	4000	.032-
500	.294	4500	.027-
600	.242	5000	.024+
700	.208	5500	.022
800	.185-	6000	.0195
900	.162-	6500	.0175
1000	.146-	7000	.016
1250	.117-		

(完) (東京大学名誉教授)

基礎語彙について(3) [本誌 No. 48] 正誤表

	誤	正
p. 30 右 1.7.	数えること	数えると
p. 31 右 1.18.	チ	千





バラッドの世界（その3）

— Billy Boy の唄をめぐって —

HIRANO KEIICHI

平野敬一

チャイルド12番のバラッド「ロード・ランダル」から派生したと考えられる童謡を2篇、前回に紹介した。ひとつはオーピー夫妻編の『オックスフォード童謡辞典』(ODNR)に収載の“Where have you been today, Billy, my son?”, もうひとつは同じく夫妻編の『オックスフォード童謡集』(ONRB)に入っている“The Croodin Doo”(ケーキー鳴くはと)の唄だった。いずれも問答体の唄であり、バラッド「ロード・ランダル」の別形あるいは変形であることは、その問答の内容から容易に推察できるものだった。

この2篇の童謡を含めて「ロード・ランダル」というバラッド——つまりそのさまざまのヴァージョンの集合体——が伝承されているわけだが、さらにその周辺に位すると思われる童謡がいくつかある。その2、3篇を今回取りあげてみたい。

キャッソンの「ビリー・ボーイ」

イギリスの俳優クリストファー・キャッソンがイギリス童謡集の決定盤とでもいるべき名盤 *Treasury of Nursery Rhymes* (Spoken Arts, 857 & 885) に吹き込んだ数多くの童謡の中に “Where have you been all the day, Billy boy?” というのがある。第1節はこうなっている。

Where have you been all the day, Billy boy, Billy boy?

Where have you been all the day, my boy Billy?

I have been all the day
Courting of a lady gay,
But oh! she is too young
To be taken from her mammy.

(「一日中どこにいたのかね、ビリー君よ」)

「一日中ある美しい婦人に求婚していたんです。でも、ああ！ その人はまだ若すぎて、お母さんから引き離すわけにいかないんですよ」)

お母さんが息子に行く先をたずねると、女のところにいたのだと答えるあたり、バラッド「ロード・ランダル」の出だしと軌を一にする。ただ、この童謡では、「ロード・ランダル」のさまざまなヴァージョンのように、息子は体の不調を訴えたりしない。相手の女性が、なにしろまだ年齢も行かないで困っているのだという。第2節になるとキャッソンの唄は

Can she brew and can she bake, Billy boy, Billy boy?

Can she brew and can she bake, my boy Billy?
She can brew and she can bake,
And she can make a wedding cake,
But oh! she is too young
To be taken from her mammy.

(「その人はお酒の造りかたやパンの焼きかたを知ってるの、ビリー君よ」)

「知ってるとも、ウェディング・ケーキも造れるんだよ。でも…。」)

となり「ロード・ランダル」の悲劇から遠ざかっていく。さらに第3節に入ると

Is she fit to be your wife, Billy boy, Billy boy?
Is she fit to be your wife, my boy Billy?

She's as fit to be my wife
As a fork is for a knife,
But oh! ...

(「その人はお前の奥さんになるにふさわしい人の、ビリー君よ」)

「ナイフにフォークが合うようにぼくの女房にふさわしいんだよ。でも…。」)

となっている。ここどころは、ヴァージョンによって異なる。たとえばオーピーの『童謡集』(ONRB)では “as a sheath is for a knife” (ナイフにさやがぴったりのよう) となっているし、古いところでは “as to the hand befits the glove” (手袋が手にぴったりのよう) の形も出てくる。そして最後の締めくくりとして

次のスタンザが來るのである。

How old may she be, Billy boy, Billy boy?

How old may she be, my boy Billy?

Twice six, twice seven,

Twice twenty and eleven,

But oh!...

〔でその人はいくつなの、比利君よ〕

〔6の2倍、7の2倍、(いや)20の2倍に11を加えた数。それでも…〕

これがこの唄のいわば「落ち」になっている。若すぎて困るという女の年齢が結局 $20 \times 2 + 11$ すなわち51歳ということが明らかにされる。この唄の19世紀のヴァージョンでは年齢の表現がすこし異なり “twice six, twice seven, twice ten, (and) twice eleven” となっていて結局22歳だということをいいたいらしいのだが、上記のキャッソンの歌いかたのほうが分かりいいし、また古い18世紀のヴァージョンも、そうなっている。

キャッソンがレコードに吹き込んでいるこのヴァージョンはオーピー夫妻の『童謡集』(ONRB) のヴァージョンとほぼ同じである(ただしオーピーのは全部で5節)。オーピー夫妻の『童謡辞典』(ODNR) のヴァージョンの方は、これと少し異なり、各スタンザの最終2行が “Although she is a young thing, / And just come from her mammy.” (彼女はまだ若い子で、お母さんの手もとを離れたばかりだが) となっている。しかし基本的には同じヴァージョンといってもさしつかえないであろう。

オーピーによれば、このBilly Boyの唄の初出文献はグラスゴーの民謡採集家デーヴィッド・ハード(David Herd)の『スコットランドの唄とバラッド』(Scots Songs and Ballads¹⁾) ということになっている。ハードが採録した形は

I am to court a wife,
And I'll love her as my life,
But she is a young thing
And new come frae her minnie.
She's twice six, twice seven,
Twice twenty and eleven,
Alack, she's but a young thing,
And new come frae her minnie!²⁾

となっている。大意は「ぼくは求婚するつもりだ。彼女を自分の命のように愛するつもりだ。ところが彼女は若くてお母さんの手を離れたばかりだ云々」。またこの唄の主人公が Billy boy でなく Tammy となっている

例がスコットランドのヴァージョンにいくつかあるし、ハリウェルの1844年のヴァージョンでは Billy が Willy になっている。

ところで、この落とし話のようなコミックな唄がどうして「ロード・ランダル」という毒殺を主題にしたバラッドと結びつくのだろうか。バラッドとこの童謡の出だし似ていることは確かだが、それ以外は、似たところがほとんどないように思われる。

19世紀の民謡収集家の1人ベーリング=グールド(S. Baring-Gould)の編になる『童謡集』(A Book of Nursery Songs and Rhymes, 1895)³⁾に “My Boy Billy” が採録されている。第1スタンザだけを挙げてみると

'Where hast thou been to-day,
Billy, my Billy?
Where hast thou been to-day,
My honey boy?
I've been a-courtin', mother,
Of a fair lady gay,
Yet she's too young
To be taken from ner mammy.'

となる(以下4スタンザあるが省略)。訳はつけるまでもなかろう。ベーリング=グールドは、この前年に出版した『民謡の花輪』(The Garland of Country Song, 1894)にこの唄をすでに採録しており、そこで若干の注解を加えているというが、筆者の手もとにその編著がないので上記1895年版本の巻末ノートによってベーリング=グールドの見解を確かめてみよう。それによると「この広範に流布している童謡は、ある長い物語のほんの一部にすぎない」。母親の諫止(むし)をきかずに求婚に固執する若者は、やがて女に毒を盛られることになる。そのあとの問答が、すなわち「ロード・ランダル」の前回に紹介した問答 (“make my bed soon...”) になるのだという。つまり、「比利・ボーイ」という一見たあいなコ・ミック・ソングが「ロード・ランダル」の悲劇のpreludeだというのである。しかし、ベーリング=グールドは、この2つを結びつける文献的根拠を有していたわけでないらしく(少なくともベーリング=グールドはそういう資料を提示していない)、どうやら頭からそう思いこんでいたにすぎないということらしい。したがってオーピーやその他の研究者の大勢は、ベーリング=グールド説を踏襲せず、童謡「比利・ボーイ」とバラッド「ロード・

1) 1776年。Manuscriptの形で2巻あり、Herd MSと略することが多い。

2) Opie, ODNR, p. 80より。frae=from; minnie=mammy; Alack=Alas.

3) Reissued by Singing Tree Press, Book Tower, 1969.

「ラ・ンダル」の出だしの類似を認めて两者間の直接のつながりを認めないのである。ベーリング＝グールドの直観(?)を裏付ける古い文献的資料がこれから出てくることも、あまり期待できないように思う。

古い文献的證素はさておき、この「ビリー・ボーイ」の唄が、いまもかなり広く歌われているので、その現況について少し考察してみたい。

“My Boy Willy”

先に紹介したキャッソンの唄も悪くはないが、わたくしがもっと聴き親しんでいるヴァージョンは、アメリカの民謡歌手ジーン・リッチャー (Jean Ritchie) とカナダ出身のオスカー・ブランド (Oscar Brand) の2人による軽快な美しいデュエットである。これはレコード⁴⁾にもはいっており、ご存じの読者もいるかと思うが、第1スタンザをあげてみよう。

Where have you been all the day, my boy Willy?
Where have you been all the day, Willy won't
you tell me now?

I have been, all the day, courtin' with my lady
gay,
But she is too young to be taken from her Mammy,
But she is too young to be taken from her Mammy.

Billy がここで Willy になっているが、人名の Bill と Will とが interchangeable であることを考えると別にいぶかるにあたらない(19世紀のハリウェルのヴァージョンでも Willy となっていた)。この唄は、キャッソンやオーピーの ONRB ヴァージョンと本質的な差違はない。第2スタンザ以下、繰り返しのところを省き要旨だけを挙げてみる。

Can she brew and can she bake?
She can brew, she can bake, she can make a
wedding cake.

Can she weave and can see spin?
She can weave, she can spin, she can do most
anything.

(織物を織ったり、糸をつむいだりできるかね？
織物も糸つむぎも、たいがいのことはできますよ)

Can she make up a bed?
She can make up a bed, forty feet above her head.
(彼女はベッドを整えることができるの？
できますとも、頭の上40フィートも高い高いベッドを)

How old is she then?

Twice six, twice seven, twice twenty and eleven.

(ではいくつなの？6の2倍、7の2倍、20の2倍に11を加えた数。)

そして最終スタンザは

Did you ask her to wed, my boy Willy?
Did you ask her to wed, Willy won't you tell me
now?
Yes, I asked her to wed, and do you know what
she said?
—“I am much too young to be taken from my
Mammy,
I am much too young to be taken from my
Mammy.”

となっている。

このコミックで間の抜けた童謡が「ロード・ランダル」と直接結びつかないにしても、ほぼスコットランド起源であることは先に紹介した Herd MS (1776) とか19世紀初頭のスコットランド抒情詩集などに早くから顔を出していることなどから推定できる。しかしリッチャーとブランドの上掲のヴァージョンにみられるように、現在ではアメリカにおいても広く流布しているのである。民謡収集家のシャープ (Cecil Sharp) などは、今世紀はじめ(1917年)すでにノースカロライナ州山間部のヒルピリーたちの間に伝承されているかなり長い(8スタンザの)ヴァージョンを採集しているのだからこれはアメリカにかなり古くから根を下ろした童謡と考えていい。しかし英米のヴァージョン間にあまり大きい差異はなく、シャープが採録したアメリカのヴァージョンに近いものをイギリスの幼児用レコードでホワイトン (Wally Whyton) が歌ったりしている。またアイルランドの子供たちが愛唱する遊び唄の一つに “She can knit and she can sew” ではじまるのがあり⁵⁾、「ビリー・ボーイ」の唄の流布の広さを示している。

“The Comedy of Billy and Betty”

もう1篇、結婚とビリー君とがからんでいる童謡がある。ただし、こんどはやたらに結婚したがっているのは

4) 歌詞に多少の異同はあるが、現在次の2つのレコードに入っている。Oscar Brand & Jean Ritchie (Archive of Folk Music, FS-207); Jean Ritchie, Oscar Brand, David Sear (Folkways Records, FA-2428).

5) Cf. So Early in the Morning—Irish Children's Traditional Songs, Rhymes, and Games. Collected by Diane Hamilton (Tradition Records, TLP 1034).

女のほうである。「ピリー・ボーイ」の唄と同様、これも Herd MS に採録されているスコットランドの唄がもとになっているが、現在伝わっているもっとも普通の形は

When shall we be married,
Billy, my pretty lad?
We'll be married tomorrow,
If you think it good.
Shall we be married no sooner,
Billy, my pretty lad?
Would you be married tonight?
—I think the girl is mad!⁶⁾

となっている。大体の意味は「私たちいつ結婚するの、美男子のピリー君よ?」「明日結婚しよう、君がそれでいいというんなら」「もっと早くできないの?」「今晚結婚しようというのかい? (この娘は頭が変だ!)」。最終行が男の傍白で、あとは男女の問答になっている。

オーピー夫妻の『童謡集』(ONRB)では、これは「ピリーとベティーの喜劇」という題名のもっと長い5スタンザの唄になっているが、最後まで女ははやる気持を抑え難いのに対し、男は現実的で冷ややかである。例のHerd MS では男の名は Nicol o' Cod となっているが、Nicol o' Cod への言及は、すでに17世紀のブロードサイド・バラッドの中にみられるというから、かなり古いされ唄であることが推定される。しかし、この男女の気持の食い違いから起こる情況の喜劇性は、いつの時代になっても古くならないとみて、童謡や民謡として英語圏で広く愛唱されている。アメリカではもっとアメリカナイズされた “dear old buffalo boy” のヴァージョン、たとえば

Oh, when we going to marry, to marry, to marry,
When we going to marry, dear old buffalo boy?
I guess we'll marry in a week, in a week, in a week,
I guess we'll marry in a week, that is if the weather is good.

という出だしではじまるのがあり、ユーモラスな民謡として人気を保っている。最後は男に子供がいて結婚できないという「落ち」になるのだが、この唄を Sam D. Hinton がいかにもコミックに歌っている軽快なヴァージョン（全部で11スタンザ）がアメリカ国会図書館の「アメリカ民謡記録(Archive of American Folk Song)」のコレクションに入っている⁷⁾。

再びバラッドと童謡について

「ロード・ランダル」のさまざまのヴァージョンからこの稿を始めたのであるが、わたくしが特に気にしたのは、伝承バラッドと伝承童謡の関係だった。「ロード・ランダル」のヴァージョンがそのまま童謡として扱われる例（たとえば “The Croodin Doo”）もあるし、今回のはじめにあげたキャッソンの歌う「ピリー・ボーイ」のような、直接の派生とはいえない例もある。もっとも後者にしても、古いバラッドのある場面が飛火して、全然別の comical な方面へ発展したケースと考えることは不可能ではない。ただ、民謡とか童謡というものは、すべてちゃんとした系譜とか由緒があるわけではなく、元来、関係のなかったものが、なにかの偶然で合体してひとつになる場合もある（たとえば前半と後半とがそれぞれ起源を異にする “Goosey, goosey gander” の童謡の場合のように）。バラッドでは、ある情況を描くのに、限られたいくつかの紋切り型的表現 (cliché) を組み合わせていくのが普通の手法であるように、民謡や童謡もまったくの新しい創作という例はむしろ少なく、限られた人間関係のきまつたパターン——つまり人間関係のクリチャーとでもいいくべきもの——を組み合わせるという場合の方が多い。「バッファロー・ボーイ」の唄はアメリカの native product であるといわれているが（アメリカ Library of Congress 発行の解説を参照）、スコットランド発生の「ピリーとベティーの喜劇」とまったく同じ男女関係のパターンに依存していることは明らかである。男女の気持の齟齬(ち)はおおげさにいえば人生永遠の課題のひとつであり、その表現のしかたに無数のヴァリエーションがありそうなものだが、伝承の世界では、案外、型の数が限られているらしく、同じクリチャーが繰り返し顔を出してくる。たとえば30年代のアメリカの吟遊詩人ガスリー (Woody Guthrie) とヒューストン (Cisco Houston) が歌っているマウンテン・ソング「悪魔のようなマリー」(“Devilish Mary”) を聞いてみると、その中に “I'm going back to mamma/'Cause I'm too young to marry” というのがリフレインのように繰り返し出てくるのに気付くが、わたくしはそれと「ピリー・ボーイ」の唄の中の “She is too young to be taken from her mammy” という繰り返しとのつながり

6) Cf. Opie, ODNR, p. 74. なお『マザー・グースのうた(第2集)』(草思社近刊予定)で谷川俊太郎氏がこの訳出を試みるはず。

7) Cf. Anglo-American Songs and Ballads (Library of Congress, AAFS L21).

を気にしないわけにいかなくなる。といって、わたくしはアメリカの “Devilish Mary”（これにも無数といつていいほどの数々のヴァリエーションがある）がイギリス伝承の “Billy Boy” に由来するといっているわけではもちろんない。人間の創出しうる情況とか表現には、おそらく限度があるものであり、重複や類似は避け難い。さまざまのクリシェーが生まれるのは必然であるが、それを組み合わせる過程で、ほとんど無限の変化を生みうる。紋切り型でも、その組み合わせが変われば、当然、新しい唄になるのである。唄のメロディーとその構成要素の組み合わせについても、似たようなことが言えそうだが、これは別に考察する必要があろう。

オーピー夫妻の童謡集にバラッドがはいっているところから分かるように、バラッドと童謡との間には必ずしも画然たる区別があるわけではない。伝承の唄のジャンルについて考えかたがいくらか厳密に、そして窮屈になってきたのは20世紀にはいってからであって、それまではバラッド、民謡、童謡などのあいだの区別は、きわめておおまかなものだった。現在では、たとえばマザー・グースの童謡とチャイルドのバラッドは、はっきり別のジャンルに属すると考えられることが多く、バラッド研究者が童謡を論じるというようなことは、少なくとも日本の学界では起りそうもない。

しかし、たとえば先に引用したベーリング＝グールドの『童謡集』(1895) をひもとくと、現在とは比較にならないほど童謡の選択基準がおおらかであることに気がつ

(p. 19 よりつづき)

平野 たしかにそういう大学の体質というか姿勢が英語教育に悪影響を与えていた点がありますね。日本の大学の英文科は英語教師を養成しているという自覚が乏しいし、体制も整っていないが、卒業生の多数が英語教師になるという事は知りすぎるほど知っている。大学の英文科で学生が本格的な語学訓練を殆んど受けないまま、実際の現場で語学教師という職につく——そこに問題があるように思います。文学的素養とか教養は、あればある程良いし、あるに越したことはないが、なにはさておき自分がやる仕事に対する最小限の技術的訓練と熟練——大工ならかなづちやかんなの使い方に当たるもの——それを欠いては話にならないと思います。

太田 教師養成の課程、これは英語に限らないかもしませんが、それが非常に手軽だと思いますね。ドイツなどでは大学の上に1年間 teacher training college みたいなのがあって教育実習も含めて徹底した養成が行なわれている。

く。もちろん「童謡集」だから子供の唄が中心だが、現在ならチャイルド95番 (‘The Maid Freed from the Gallows’ 「絞首台から救出された乙女」) として伝承バラッド集へ追いやられるに違いない “The Golden Ball” (同書 p. 85) と “The Prickly Bush” (p. 104) がここでは「童謡」として採択されており、チャイルド155番 (‘サー・ヒュー、あるいはユダヤ人の娘’ Sir Hugh, or, the Jew’s Daughter) が “The Jew’s Garden” および “Little St. William” の2篇の「童謡」となって登場しているのである。また現在では遊び唄 (singing game) のジャンルに追いやられ、童謡(nursery rhyme) の扱いを受けない (少なくともオーピー夫妻によれば) 数々の唄、たとえば “Green gravel, green gravel” あるいは “Forty dukes a-riding...” などもベーリング＝グールドの童謡集に入っている。その他お涙ちょうだいもの (tear-jerker) として現在では民謡扱いを受けることが多い “Babes in the Wood” もここでは「童謡」の扱いを受けている。

ベーリング＝グールドは、一時代も二時代も前の学者で、その見解で現在のわたくしたちにとって学問的に参考になるものは、ほとんどないといつていい。しかし、こまかいジャンル別にこだわらぬおおらかさ、伝承の唄を総体としてとらえることを知っていたスケールの大きさには見習うべき点多いように思われる。細分化、緻密化のみが学問の方向であるとはいえない。

(東京大学教授)

朱牟田 日本では教育実習と称して2、3週間ですね、あんな馬鹿げた話はない。さしあたり職がないから教師でもやるかという「デモ教師」の風潮がどうも尾を引いている。しかしながらといって、大学英文科と英語教師養成コースを混同する意見もまた困るんで、大学の英文科では training や practice ばかりやれという人もいるが、学問としての英文学・英語学をおろそかにするわけにはいかない。あくまで教員免許の規定の問題として考えるべきですね。

平野 私もそうだと思います。英語学や英文学の素養を抜きにした純粹に技術としての英語教育というとらえかたにはもちろん問題がないわけではありません。ただ、日本の現状はそういうことが問題になる段階にはまだまだなってないということだと思います。

編集部 今日はいろいろ有意義なお話、特に英語教師にとって傾聴すべき問題を出していただき、大いに考えさせられ勇気づけられることと思います。どうもありがとうございました。
(速記: 上山采子)

Challenge & Response

担当

- 前田 陽一（国際文化会館専務理事）
西山 千（国際コミュニケーター）
太田 朗（東京教育大学教授）
平野 敬一（東京大学教授）
國弘 正雄（国際商科大学教授）
小林 祐子（東京女子大学短大教授）
松下 幸夫（E L E C企画部長）

「国際英語」と「国内英語」

平野敬一先生は、國弘正雄著『国際英語のすすめ』の書評（『英語教育』1972年12月号所収）で、「『国内英語』からなかなか抜け出せない私たち英語教師の多くには及びもつかない次元の発言や発想が少なくなく、教えられるところが多い。」とし、國弘氏の native English に盲従しない国際英語の立場に賛成していますが、国際英語とは似て非なる「国内英語」というものの実態を指摘して下さるようお願いします。最近の英語教育論争への一つの有力な示唆ともなると考えるからです。

（荻市・高木信明）

私が書評で「国内英語」という表現を使ったのは、もちろん國弘氏が唱道される「国際英語」に対する便宜的な対立概念としてでした。「国際英語」と程遠いところにいる英語教師の大部分が明け暮れその中に浸り、付き合いをさせられている英語を、漠然と指したものでした。この「国内英語」の実態に入るまえに、まず國弘氏のいわれる「国際英語」がなにを指すのか、それをもう一度確認する必要があるように思います。

私の理解と記憶に誤りがなければ、氏の「国際英語」は3つの対立概念（場合によっては仮想敵）を想定していたように思います。その1つは、英米人の native English. 氏によれば「国際英語」は native English とともに異質のもの。英語を母国語としない日本人は native English を到達目標にする必要はないし、それに対し徒らなる劣等感をいただく必要もない。むしろ脱英米的な、international な、neutral な英語の運用を目標にすべし、というのが氏の主張の骨子であったように記憶しています。これを居直りと評する人もいるだろうが、英語はなにも英米人の独占物でないのだし、こういう意味の「国際英語」に私も賛成した（鈴木孝夫氏もこれに近い主張をしておられる）。

「国際英語」の第2の対立概念は、いうまでもなく日本の「学校英語」です。受験志向型の日本の学校英語の暗号解読的な、重箱の隅をつくような頃末主義、生徒の運用能力をかえって萎縮させるようなさまざまの特色について、ここで私がくり返す必要もないでしょう。概して線の細い受動的な「学校英語」に対して國弘氏は線の太い能動的な「国際英語」を提唱しています。

「国際英語」の第3の対立概念は English conversation という時代の寵児（ひもの）です。國弘氏は英会話の専門家と称されることを好まないだろうと思います。「英会話」というものが教科としても専攻としても、どれほどあやふやなものか、氏は熟知しているからです。日本会話の専門家が存在しないように、英会話の専門家も存在しないはずです。このことが分かれれば「国際英語」の志向するものが必然的に「英会話」と異なることが理解されるでしょう。端的にいえば、中味があるかないかという問題に帰着します。

さて、私が書評で使った「国内英語」は、だいたい上記の「学校英語」を念頭においたものです。しかし、日本という国内においてしか成り立たない「英会話」なるものも、もちろん「国内英語」の範疇に入ります。したがって「国内英語」は「学校英語」よりは、もう少し広い概念ということになるでしょう。

私たち——例外的な人を除きごく一般的の英語教師を念頭においての話ですが——が日常接している英語の特色をあげるなら、一つはそれが国内でしか通用しない、あるいはもっと極端にいうなら自分の教室でしか通用しないという点でしょう。かつての漢文が日本国内でしか通用しない外国語の解説形態だったように、日本の英語も国内でしか通用しない解説形態という特質を多分に帶びてきています。その証拠にといふと少し異論が出るかもしれません、たとえば英米人による授業参観を日本の英語教師の大多数はいやがるのでなかろうか。自分の教えていることは英米人には通用しない「国内英語」に

すぎないということを、教師自身がよく自覚しているからではなかろうか。中国人が昔の日本の漢学塾の授業を参觀するようなものだといえばいいすぎるでしょうか。

かつて海外旅行をした英語教師の一団が英語国で通訳をつけていたという「伝説」があります。伝説にすぎないと思いますが、そういう伝説がまことしやかにまかり通るだけの素地が英語教師の方にないわけではありません。もっとも「源氏物語」の訳者アーサー・ウェーリー氏も日本へ来れば、やはり通訳を必要としたであろうし、日本の英語教育は英語の実際的運用という顕在能力とは直接関係のない職業だともいわれているので、それはそれでいいのかもしれません。

さきに「国内英語」という表現を使ったとき、私の念頭をかすめたのは、日本における巨大な英語の国内マーケットのことでした。品の悪い言いかたになりますが、わが国ほど英語でメシを食うのが楽なところは、世界広しといえども他にないのでなかろうか。英語というすぐれて国際的な外国语を職業に選んでも、多くの場合、国外マーケットをまったく顧慮する必要がないのです。国内マーケットが常識を越えるほど巨大だからです。何十万という大学受験生を相手にするだけで英語は成業(なり)としてりっぱに成立するのです。私はこれを、ある意味で、英語教育にとって不幸な事態だと思っています。こういう形で異常増殖した英語人口が、かりに(たとえば例の平泉試案を実施した結果として)大幅に縮少するようなことになっても、私はそれを必ずしも不幸なことは思えないのです。

「国内」という形容詞を冠したくなるのは、なにも英語に限りません。日本の英文学研究も、少数の例外はあります、おそらくいほど国内志向型です。日本のさまざまの学会の中で外国人研究者の参加がもっとも少ない、つまり国際性がもっとも希薄なのは、英文学会をはじめとして外国文学の学会であるということは、考えれば考えるほどふしげに思われますが、それが厳然たる事実なのです。つまり、日本の英文学研究も国内マーケットでじゅうぶん事足りるので、一部若手の間、たとえばアメリカ研究や英語学などの分野で、学問の国際性への志向がみられないわけではありませんが、大勢は国内の仲間志向型から抜け出しています。要するに、日本の英語も日本の英文学も、巨大な国内産業という基盤の上にどっかりあぐらをかいているということなのです。私たちが容易にそういう「国内性」から抜け出せないのは、抜け出す必要が(個人の心構えとしてなら別ですが)外的にも客観的にも存在しないからです。抜け出さ

なくても、さしあたり食うに困らない、というのが日本の英語界の幸福な(?)現状です。

(平野敬一)

英語の「敬語」と社会慣習

前号での「英語の敬語」についての“challenge”に対して、日本語的「敬語法」と英語独自の“polite expression”とを対置させた小林祐子先生の説明は大変興味深かったのですが、これからが本論というところで終わる感がしました。その「英米の文化、とりわけ人間関係を律する社会慣習」にまで掘り下げた説明を続けていただきたいと思います。

(長野市・丸山泰治)

先に私は英語には相手に対する敬意を示す文法的手段はないが、ことばの組合せで丁重さを表わすことができるとのべました。しかし、日本人とアメリカ人とでは、「敬語意識」に差があり、その差が対人関係のとらえ方の違いにあるように思われましたので、敬意表現をとりかこむ extralinguistic な事実への認識が必要なことを、一言付け加えた次第です。説明を続けるようにとのおすすめを受けて、この問題にふれてみたいと思います。

私が前回扱った英語の「敬語表現」は、主として、日本人の敬語感覚からとらえやすい、礼儀正しいあらたまつた表現でした。事実、日英の敬語表現の比較において、英語の formal style に代表される丁寧表現を、日本語の敬語に対応するものとして扱っているひともあります。(例えば、Goldstein, Bernice Z., and Tamura, Kyoko: *Japan and America; A Comparative Study in Language and Culture*, Charles E. Tuttle Company, 1975.)もし敬語の機能を、目上に対する「敬意」表現に限定するなら、対等な人間関係を原則とするアメリカで、ことさら丁重な待遇表現を必要とする相手は、親密度も薄く、身分差が意識されるあらたまつた状況ということになりますので、英語の敬語的表現はおのずと formal style と結びつくことになりましょう。

ところで、私たち日本人が敬語を使う相手は、先輩や上役などの社会的上位者や、子供の教師や医者などの心理的上位者など、人間関係で上位にたつと把握されるひとが多いのは事実です。が同時に、上下関係にかかわりなく、相手に対する礼儀として敬語を使っていることもあるのではないでしょうか。タテ社会に生きる私たちは、敬語の機能を主として、前者を中心に考えますが、

ヨコ社会に生きるアメリカ人は、むしろ後者を “polite expression” の中心的働きに考えています。相手の地位に対してより、相手の気持に対する「敬意」を politeness の本質としてとらえているようです。

“Linguistic politeness” に対する考え方のずれは、2つの社会の人間関係の認識法の違いと関連があるようと思われます。対人関係において、日本人は自分を中心とした広がりのなかで相手を位置づけようします。この傾向が、家族的社会構造や、日本人の自我意識の構造とかかわりのあることは、すでに多くの人が指摘している通りです。このように捉えられた人間関係においては、自分のパートをうまく弾いてハーモニーを破るまいとする楽団員のように、言語的にも非言語的にも、「分際」を守るということに敏感とならざるを得ません。

一方、アメリカ人は、相手を一応自分と切り放して、個人として認識する傾向にあります。オーケストラの団員というより、各ソロイストとして認め合うといったらよいでしょうか。もちろん力量の落差が身分差を生んでいるところでは、言語関係も対等ではありません。しかし、親密度を加えると共に、対等な言語関係に移る可能性を備えたところが、日本と違うところです。個と個の結びつきが、両者を隔てる外的要素をミニマイズする方向に働くからです。このような個を基調とした人間関係では、相手を個として尊重した言動が “polite” であって、ただ形式的な thank-yous and pleases ではないと考えられがちです。

これは、日英の「敬語表現」の比較に問題をなげかけます。「相手を尊重した」表現という、言語の形式の上からおさえられない “politeness” は、とり扱いがきわめて厄介です。話し手と聞き手の関係、親疎の度合い、発話の状況によって、“politeness” が千差万別の表現をとり得るからです。そこで日英に共通する “linguistic politeness” の定義をきめ、それによって対象をしほるという方法が考えられます。しかし、実際問題として定義の適用が容易でないことを、敬語問題にふれた Robin Lakoff の “Language in Context” (*Language* Vol. 48, No. 4, 1972) と題する論文を読んだときに、私は痛切に感じました。

このなかで Lakoff は、敬語的 “politeness” を、言語的に、自分を卑しめ、相手をたてることと定義し、明示的な表現手段をもたない言語にも見られると、英語を例にとって、その普遍性を強調しています。

たとえば、義務をあらわす “must” が、一定の extra linguistic の条件のもとで、謙譲的敬意表現を生み出す一例として、*You must have some of this cake.*” を

あげています。こちらのすすめに応じることが、強制を必要とするほど、気のすまないと違いないと、へりくだった気持を “must” によって暗示し、「粗雑ですが、どうぞ」に近い表現にしているというのです。そして、尊敬表現 (the status type of politeness) より、謙譲表現 (the humbling type of politeness) の方が、英語では屈折した表現形態をとると付け加えています。

上記の状況で “must” が友好的配慮の表現に効力を発揮していることは私も認めますが、Lakoff のいう理由からではありません。相手が感じる心理的距離を自分の側から強引に縮めて、提案する行為を受けやすくしているように思われるからです。

尊敬にしろ、謙譲にしろ、相手との隔たりを言語的に認めるのが、日本語の敬語の特徴です。相手に圧力をかけ、隔たりを破ったところに、自己卑下が暗示されるといった論理は、タテ社会の “linguistic politeness” に育ったものには受け入れにくいものです。以上のことから、たとえ、敬語的 “politeness” に普遍的定義が与えられても、その定義を運用する側の意識に問題があれば、該当する表現を選出する尺度としては、あまり有効でないことがおわかり頂けたと思います。

ここで少なくともいえることは、アメリカ人が直観的に “polite” と感じる表現には、日本語の敬語に近い働きを示すものと、そうでないものとがあるということです。Lakoff は、そのどちらも、敬語普遍論の立場からとらえようとしていますが、私は後者にアメリカの人間関係を前提に構成された日本語の「敬語」とは異質の politeness を認めます。

(小林祐子)

ていねいさとイントネーションの関係 (ふたたび)

本誌50号で、ていねいさとイントネーションの関係について質問がなされました。それに対して十分なる解答がなされてないように思いましたので、一筆お便りします。

ていねいな言い方をするということの中には、音調以外に、速度、声の大きさ、明瞭さ等さまざまの音声的要素も、また表情とか態度も関連してくるものと思います。したがって、音調だけを取り出して、これはていねいなイントネーションだからこの音調で言えば必ずていねいなのだとは言えないのあって、同時に付帯的でていねいさを与える要素が存在するのが普通であろうと思われます。しかし一般的にていねいな感じのする音調とか、全く逆に威圧的な印象を与える音調が場合によってはあります。

具体的な問題に入って、たとえば、① Speak more slowly. と ② Please speak more slowly. について言えば、please のついた②の方が①よりも常にていねいであるというわけではなく、音調いかんによっては逆のこととも当然ありうるわけです。イギリス英語において、'Wait for the others. とか 'Please take one. ('mは高い平坦調強勢, 'mは高いピッチから低いピッチまでの下降調強勢) は命令と取られ、'Shut the door. や 'Tell him to wait. ('mは高いピッチから下まで下降し、後少しだけまた上がる下降・上昇調強勢) はていねいな命令、すなわち依頼であるわけです。更にこれが 'Shut the door. とか 'Please wait for the others. ('mは低い上昇調強勢, 'mは低い平坦調部分強勢) となると懇願的依頼の印象を与え、非常に低姿勢になるわけです。

ついでに I'm sorry. とか I'm very sorry. についても、親しい者の間で言われる I'm sorry. とか、I'm very sorry. も、他人同士では、I'm sorry. I'm very sorry. が普通であり、更に I'm sorry とか I'm very sorry. ('mは普通の時よりもっと下がったピッチになり、あと少し上がる, 'mは普通中位のピッチから極端に下まで下降する強勢) となればもっと誠意がこもることになります。その他、いくらも例があるのですが、参考まで 1, 2 例を挙げた次第です。 (cf. R. Kingdon: *The Groundwork of English Intonation*, J. D. O'Connor & G. F. Arnold:

Intonation of Colloquial English, M. A. K. Halliday: *Intonation and Grammar in British English*, etc.)
(武庫川女子大学助教授・渡辺和幸)

前回、岡山市の竹中さんから、英語の「敬語」的表現法とイントネーションについて質問がありました。後者に関してはその重要性を指摘するだけで、説明不足だったことをお詫びします。武庫川女子大学の渡辺和幸先生から、たとえ命令文に "please" を付加しても、音調いかんによっては、丁寧な表現になり得ないというご指摘をうけました。まことにその通りで、話者の心持を表出するイントネーションの方が、言葉遣いより、言ったことの意味を決定するのに大きな力をもちます。コミュニケーションの専門家のなかには、アメリカの日常的な会話で、ことばの受け持つメッセージの量は 7%, 55% が表情と態度、38% が音声的表情（イントネーション、声の大きさ、速度、明瞭度など）によって補われるという人もいるほどです。その意味で、先生のご指摘は重要なと思います。

ただ、先生も言及されている通りあいさつ、謝礼、謝罪、依頼、問い合わせなど、発話の種類、状況によってイントネーションパターンも異なり、これが丁寧用のイントネーションと簡単にルール化しにくい面があることを指摘しておきたいと思います。 (小林 祐子)

●読者の質問および意見募集

広く読者の皆様が、時の話題、解決困難な問題等に challenge していただくための討論の広場として、前号から "Challenge and Response" の欄を開設しております。

この欄の構成は、読者からの質問に答える形式のものと読者の意見を発表する形式のものからなり、その内容は英語教育問題に限らず、広く社会・文化・国際問題等の人文科学に属するすべての分野にわたることがらを扱うことにしております。

皆様から寄せられた質問に関しては、担当の 7 名の先生方にレギュラー解答者として健筆をふるっていただくなっていますが、問題によってはゲスト解答者の登場も考えております。

ふるってご質問およびご意見をお寄せいただきたく存じます。

Solution to the Crossword puzzle on page 50.

A	N	D		A	N	T		S	P	A
C	O	R	A	L		H	O	T	E	L
T	R	I	P		S	E	N	A	T	E
					N	E	V	E	R	M
A	S	K		A	R	E		P	A	Y
G	O				V			B	E	
O	N	E		R	I	P		G	E	T
	R			A	C	T	O	R		
F	R	A	N	C	E		W	A	T	T
A	I	S	L	E		I	N	N	E	R
T	O	E		S	I	T		D	A	Y

『身ぶり言語の日英比較』

小林 祐子著

ELEC 出版部, B6 判, 200pp., ¥980

NAKANO MICHIO

中野道雄

著者の小林氏は、2, 3年前、雑誌『英語教育』に、英米人のジェスチュアについての研究を連載された。その研究が、一書にまとめられることを待望していた人も少なくなかったと思うが、このほど、ようやくそのねがいがかなったわけである。本書は、さきの連載を骨子としているとのことであるが、多くの加筆があって、独立した本として光彩をはなっている。

著者は、まず「I 文化と文化の出会い」において、人のものの見かたには、そのひとの属している文化によるパターン化が行なわれていて、したがって、特に、外国の文化を見るときには、ゆがんだ自己本位の見かたをしやすい。外国の文化を正しく理解するためには、まず、この自国文化の色めがねをはずさねばならない、と読者に、オリエンテイションを与えていている。

次に「II ことばに表わされた表情」では、まず、日本文化と英米文化では、身体の部位の切りとられたが違っていることを指摘している。たとえば、日本人は、hip は「おしり」のことだと思っているが、そうでないことを、評者も、数年前に、どこかで指摘したことがあるが、わが国の英和辞典は、評者の見たかぎりでは、hip に、なんの説明もなく「しり」の訳語を与えて平然としている。この本で、著者は、hip は「おしり」と、一部重なりあうものの、違った部位であることを明らかにしている。他に、英語の lap, 日本語の「腰」についての秀抜な観察もある。この章では、さらに、"narrow one's eyes", 「あごを出す」など、項目ごとに、日英の相違について、詳細に説きあかしている。

「III ことばに表わされた身ぶり」では、まず、読者に、身ぶりの記号学的機能について予備知識を与えたうえで、「頭をかく」対 "scratch one's head", 「首をふる」対 "shake one's head" など多くの項目別に、日英比較を試みている。さらに、身ぶりのもつ別の一面、すなわち、俗信と結びついた「まじない」的身ぶり、暗号的・隠語的身ぶりにも言及して、この本を終えている。

著者は、この研究をまとめあげるまでに、英米の小説・戯曲・新聞・雑誌などから集めた約 4500 の用例につい

て、それを 2 年半にわたって、毎週 1 回、インフォマントと会合して、チェックしたという。

このことは、著者の努力のなみなみならないことを示し、したがって本書の信頼度を高めているわけであるが、同時に、著者のとったこの方法は、この本の目的にとって最良のものであったと言えよう。ジェスチュアの研究は、現地に永年住んだり、native speakers の動作をムービー・カメラでとったりしなければ、ちゃんとすることはできない、というひとがいる。それはそれで結構なことだが、もっと大切なことは、第一に、intercultural な比較の視点であり、第二に、ジェスチュアとそれをあらわしている言語表現との関連を調べることである。Roman Jakobson は、次のように言っている。

"...the linguist ought to take into account the highly instructive indigenous terminology, both nominal and verbal, used for referring to the customary gestures, head motions and facial expressions." ("motor signs for 'yes' and 'no'" *Language in Society*, Vol. 1, No. 1)

「非言語伝達」といっても、言語からまったく独立して存在するのではなく、むしろ、言語によって強く規定されているのが、人間のコミュニケーションの特徴である。すなわち、ある国語の表情や身ぶりを表現するイデオムは、その国民の「非言語伝達」の姿をよく反映しているものである。

さらに、「非言語伝達」は、言語から独立していないだけでなく、その国民の文化全体からも強い規定を受けている。小林氏は、この点をも強調して、英米の「立の文化」、日本の「坐の文化」、英米の「自己主張の文化」、日本の「あまえの文化」などの性格が、身ぶりとその言語表現に強くあらわれていることを説いている。

本書は、英文の読解の手びきになったり、英米人との交際におけるエチケットを教えてくれたりもするが、むしろ、文化・コミュニケーション・言語・非言語伝達の相互関係について深い洞察の道を開いた本として、高く評価することができる。（神戸市外国语大学助教授）



Improving Oral English Through Choral Speaking

by Valentine K. Larson

Tokyo: Gaku Shobo Publishing Co., 1974

iv+144 pp., ¥1200, paper

In this book, Ms. Larson gives clear guidelines for the use of choral speaking in ESL classes. Although the author is not now teaching in the "TESL mainstream", perhaps because of her outside interests she has been able to recognize the values of this technique for teaching pronunciation to ESL students.

The book traces various uses of choral speaking from ancient Greece up through the present. The impetus for modern English choral speaking came in 1922 in British schools and from there spread to America and parts of the Continent. English choral speaking was originally used only for native speakers of the language. But in 1950 Morris Val Jones reported on his work with Spanish-speaking Mexican immigrant third graders in a Santa Ana, California, elementary school. He found that through choral speaking these children learned to pronounce "ate", "ch", and "sh" correctly and that "their inability to reproduce English intonation patterns is alleviated somewhat" by choral speaking of simple jingles and nursery rhymes (p. 4).

Larson argues that choral speaking "serves as a meaningful, pleasant way of improving speech" by developing better English pronunciation, articulation, rhythm and voice quality (p. 4). In addition, it "promoted social and emotional development" by giving the student a sense of belonging to the speaking group and by "developing confidence and poise", especially in the timid students (p. 5). She states that "choral speech is not a cure for all ills but it is one of the more pleasant

Harvey M. Taylor

*English Language Institute
University of Michigan*

ways to improve speech and to enjoy literature. There is a danger, however, in relying on group speaking as the sole means of improving speech and not providing enough individual oral expression and individual speech improvement work (p. 5).

"There are five forms of choral speaking especially useful in second language training, each of which meets a specific purpose. They are unison speaking, refrain speaking, antiphonal speaking, sequence speaking, and part speaking" (p. 6). Each of these types of speaking is described and illustrated.

In many ESL pronunciation classes, the teacher pronounces lists of vocabulary items for student imitation in order to teach the pronunciation of a given English sound. One of Larson's much more interesting alternatives is a fast moving jingle which can be read in unison and which provides 41 repetitions of the [ɪ] sound in only eight lines of very limited, easily understood vocabulary (p. 7). In other, non-unison types of choral speaking, the teacher can select just those words or lines for student group or individual repetition which contain the pronunciation segments to be practiced, with the teacher reading the other less applicable lines. "When the students have become used to each other and have lost their self-consciousness, the dialogue poems may occasionally be tried with two solo voices. But, on the whole, the development of all the students is greater when the class breaks into two sections" (p. 10).

Specific instructions lay out, step by step,

that thorough preparation of the teacher which is necessary for any choral selection to be used effectively. It becomes clear that the author is writing to help Japanese ESL teachers use this method in their classes. The word-by-word analysis given of the pronunciation of "Baa, baa black sheep" illustrates both the care to be taken in preparing to teach a choral selection and also the wealth of practice material found in even a nursery rhyme.

Part II of this book is a simplified description and discussion of the phonemes of English, using IPA symbols. A very brief, but adequate, introduction is given to articulatory phonology, rhythm/stress, "phrasing or grouping", and "intonation or melody." Each major allophone of the consonant phonemes is described in articulatory terms, and a few simple appropriate choral speaking drills (poems) are given with directions to the teacher for their use in teaching the pronunciation of these allophones. The vowels are treated similarly.

Part III is a series of drill selections arranged so that the "easier materials appear first, followed by the more difficult ones." Under each title is a list of the sounds "which seem to be stressed in the selection" (p. 118).

Since the text was evidently typed (much of it doubled spaced) in America and photocopied for printing in Japan, the typing errors which occur throughout should have been caught by at least one of the two consulting editors. Inconsistently, the spelling "rhyme" appears on page 30, but "rime" occurs on page 71. In a text written for use by teachers who are non-native speakers of English, such inconsistencies and typing inaccuracies detract from the usefulness of the book.

The greater problem in the use of a book such as this lies in the inherent difficulty there is in interpreting the poetry of another culture. It is hard enough for a native speaker of English to visualize and then explain the situational settings of our nursery rhymes,

poems, and other great literature; it will be next to impossible for any but the most proficient non-American ESL teacher to be able to grasp the meaning of many—perhaps the majority—of the selections given. Fortunately, a sufficiently large number of selections is provided so that the teacher may still be able to find enough that he understands to meet his needs; the author has also given clear guidelines to follow in choosing selections to be used from other sources if necessary.

One other problem for the non-native English speaker is that within any given selection practically all of the English vowel "sounds" occur. Even though the teaching emphasis may be on just those which rhyme or are otherwise frequently repeated, non-native ESL teachers may find that they are unable to provide the accurate pronunciation model needed for effective teaching here. Perhaps a tape recording of each of the selections could be made available which could be used by such teachers for initial student modeling.

There is a surprising lack of acknowledgements for the use of selections from obviously copyrighted sources; therefore, one wonders, again, about the actual imput the stated editors may have had in the producing of this book.

The ESL teacher should find materials here to add fun and interest to the necessary drilling of pronunciation. Also, if carefully handled, he will be able to teach much about the American and/or British culture implicit in the settings described. The straightforward descriptive summary of English phonology included here (with only the necessary minimum of linguistic terminology) is well worth the price of the book for any non-linguist ESL teacher. The guidelines given for using choral speaking would work equally well in either English second language or English first-language classes. These guidelines further make the purchase of this book worthwhile.

新刊紹介

■『英語科教育の研究』

教員養成大学・学部教官
研究集会(英語科部会)編

編集代表 鳥居 次好
片山 嘉雄
遠藤 栄一

本書は、教員養成大学・学部教官研究集会英語科部会の昭和47年から49年の3か年にわたる研究の成果をとり纏めたものである。執筆者はこの研究集会の会員のうちの74名と会員外の12名合わせて86名という大勢である。本書が取り上げている内容は英語科教育のほとんどすべての分野にわたっている。

全巻8章から成り、第1章英語教育の本質論、第2章英語教育の歴史、第3章英語教育教材論、第4章英語科教育方法論、第5章英語科教科課程論、第6章英語教育評価論、第7章英語教育学習者論、第8章英語教育教師論、付録：英語科教育研究上の資料・文献という構成である。

本書の特色は、英語科教育に関する重要な事項を広範囲にわたって取り上げ、研究集会における協同研究に基づいて大勢の研究者の研究成果を集大成した形でとり纏めていることである。本書1冊さえあれば英語科教育のことはおよそ何でもわかるようになっていることである。これはまた「英語科教育法」のテキストとしても使用できるように考えられている。問題の取り上げ方も英語科教育の本質に関する極めて抽象度の高

いものから、教師の海外視察のような具体的な事項にまでおよび、また最古の言語教育から最も新しい英語教育問題に至るまで取り上げている。そのうえ英語教育を学問の対象とするための方法について多くの示唆を与えるような実験例やその処理方法なども見られる。

本書は、このようにひじょうに豊富な内容をもったものであるから、現に英語教育に携わっている人達やこれから教師になろうとする人々はいうまでもなく、およそ英語教育に関心をもたれる方々には、ぜひ座右の書とされるようお勧めしたい。
(大修館書店刊、B5判、340pp. ¥3,800)
(ELEC企画部長 松下幸夫)

■『英語学研究第3巻』

太田 朗編

英語学研究第3巻は、7編の論文、4編の小論、および、103ページにおよぶ J. D. McCawley の書評をおさめている。

McCawley が書評したのは、N. Chomsky の *Studies on Semantics in Generative Grammar* (The Hague: Mouton 1972) であるが、これは、*Aspects* (1965) 以後の理論的発展(拡大標準理論とよばれる)に関する Chomsky の3つの論文 'Remarks on nominalization', 'Deep structure, surface structure, and semantic interpretation', 'Some empirical issues in the theory of grammar' を集めたものである。McCawley は、Chomsky の議論を一つずつ順

を追ってきびしく論評しており、いずれの立場に立つにしろ、見逃すことのできない書評である。

N. Terazu は等位構造の縮約に関する問題点をよくまとめており、Namiki-Ikeuchi は規則の適用順序に関する一般原則を、音韻論、統語論にわけて論じている。H. Nakajima は、*She was promised by Sam to go のような文の非文法性は全体的派生制約によって説明しなければならないと論ずる。T. Kageyama の 'How to get the opposite' は、S. Saito の英語学研究第1巻にのった 'On the semantic interpretation of the opposite' をするどく批判していくおもしろい。

J. Hinds は Raising の存在する理由は、句構造を変え、また受動変形の適用を可能にすることによって、Theme-Rheme の関係を変えることにあるとするが、これは、われわれの言語直観に訴える分析である。S. Chiba は、Complex NP Constraint の適用を受けない例外的な複合名詞句を、豊富な例を用いて論じている。

かなり荒削りな議論もあるが、言語学の核心に触れる問題と取組んだ好論文が多い。ミスプリントは少なく、印刷は鮮明だが、単語と単語との間隔があざらかな所が少々目につく。

(朝日出版社刊、B5判、354pp. ¥2,500)
(国際基督教大学准教授 村木正武)

■エレック選書

『アメリカ英語の婉曲語法』中巻

國弘正雄著

好評の上巻につづいてこのほど出版された國弘正雄氏の『アメリカ英語の婉曲語法』中巻は、数多くの特色を備えた力作で、英語にかかわり

を持つ人すべてがそれぞれの目的に応じて収穫を期待できる必読の書である。

文化人類学の手法で euphemism というメスを準備したところに、本書が上、中巻を通じて成功を収めた第一のカギがあるとすれば、そのメスの切れ味も見事で、American way of life の諸相が鮮やかに解剖されている。中巻で扱われているのは教育、社会、人種・民族、婦人、経済の各分野におけるアメリカ英語の婉曲語法だが、日ごろ英文の新聞・雑誌などを通じて現代アメリカに接している日本人は、時事英文のいたるところに出てくる euphemistic expressions の背景が巧みに解説されている本書によって、理解度を増進することができよう。

その意味で本書は独自の方法論に基づいた高度のアメリカ文明論であり、アメリカおよびアメリカ人を知ろうとする者に新鮮な視点を提示する「教養書」なのだが、同時に英語学習の「実用書」という側面を合わせ持っている点も著しい特徴である。優れた文化人類学者として調査、収集した膨大なアメリカ英語の用例集を、当たっての英語実務家でもある國弘教授が整理、分析している本書は、「國弘英語」の真髓を明らかにするという「副産物」までについており、読者の想像力しだいで英語習得の「王道」に親しく接する指南書ともなりうる。

各例文に添えられた「大意」に教えられるところも多い。「直訳主義」に傾きがちな日本人一般に、この大意が示唆する「原意把握主義」ともいうべき姿勢は貴重だ。

学術研究書の質を維持しながら、語り口は平易で軽妙、「楽しい読み物」の性格は特筆に値する。これが広い読者層を捕えて、日本人のアメリカ（人）理解に貢献することを強

く希望したい。

(ELEC 出版部刊、B 6 判、178pp., ¥860)
(評論家・東海大学講師 山岡清二)

■『現代英語教育法』

緒方 勲著

本書は著者もまえがきで述べているように、主としてこれから英語教師をめざす人、あるいは若い英語教師を対象に書かれたと見てよいであろう。ページ数の割に内容項目が多く、英語教育に関するほとんどすべての基礎的知識から懇切に解説が施されているのもそのためである。しかし、それでいてしかもかなり高度なところまで議論が及んでいるのが本書の特色である。それは本書が、よくある観念的で冗長な教授法書ではなくて、教授法についてはベテランの著者が、教授法のエッセンスと思われる諸点を簡潔・明快に書き上げたからであろう。

全体は 6 章から成り、第 1, 2 章では英語教育の目標、言語としての英語 (langue と parole の区別その他)、学習の動機づけ、学習指導要領についてなどの教育・学習上の基

本問題が論じられている。第 3 章は応用言語学としての教授法理論の位置づけ、学習段階などについてである。話題は変形生成文法の応用にも及んでいるが、現在のところ言語観として以外には未だ実用性は少ないと著者は述べている。第 4 章は Direct Method (Natural, Gouin, Berlitz, etc.), Oral Method, Oral Approach などの各教授法についての説明である。第 5 章「領域別の指導」には本書の中でいちばん多い約 40 ページが費やされ、音声、聞き、話し、読み、書くことの各領域について実例を示しながら具体的に説いてある。著者の体験、学識がにじみ出ているように感じられる章で、本書のクライマックスであろう。第 6 章は授業の進め方と評価についてで、教案の作り方などについても具体例をそえて解説が施されている。随所に挿入されている〈参考〉欄の引用も適切でおもしろい。参考文献欄の書目解題、付録の学習指導要領の写しも役に立つ。全体として分りやすく、実践的な書き方が読者の興味をそそる。

(現代文化社刊、A 5 判、154pp.. ¥1.200)

(早稲田大学教授 小島義郎)

►国際社会と日本文化を総合的に考える

英語展望 合本 (1972~'75)

アメリカの目指したもの 本間長世 平均的アメリカ人
猿谷要 ウォーターゲートをめぐって 國弘正雄
日本文化の国際性 國弘正雄/K. バトラー/山本正/外
山滋比古・斎藤襄治・武田勝彦・貝瀬千章
オーラル・アプローチ再評価 安井稔/伊藤健三/山家保
国際化時代の英語教育 外山滋比古/中村敬/若林俊輔
身ぶり言語 小林祐子/西山千/今村茂男/中野道雄
★最寄りの書店にお申し込み下さい。 ¥ 6,000

新刊紹介



『私が採点する日本の英語』 ドナルド・ハリントン著、平野みどり訳 B 6 判204頁、790円 英友社

大学入試が日本人の実用的英語力の養成に悪影響を与えていたことはよく言われる事だが、日本の英語教育に全面的に現代英語を導入する事を主張する native speaker の立場から、実際の入試問題を具体的に批判し、その関連で教育制度と教育産業・出版社へも直言している。

『日本人の発想から英語の表現へ』 國際交流基金編 B 6 判194頁、780円 研究社

第1部 文化交流について 内村直也／語学隨想 島内敏郎／誤解の回避法 西山千／翻訳のこつ 大方保／日英慣用句の考察 長谷川潔 第2部「有難迷惑」、「バタ臭さ」、「ゲバ」、「居直る」、「白ける」等約600項目の日本語に対応する英文を収めた和英表現集。

『知的対決の論理——日本人にディベートができるか』

『ハラ芸の論理』 松本道弘著 四六判326頁、322頁各980円 朝日出版社

一方で外国語学習がさかんであり、他方で日本人論・日本語論は依然として関心を集めているが、ロジックの相違という視点から統合的にとらえ、西洋人と日本人の思考様式の違いを宗教観、法意識、対人関係、ユーモアの感覚を通して明快に述べている。

『マザーグースのうた』 谷川俊太郎訳、堀内誠一絵 A 5 判62頁、800円 草思社

マザー・グースの唄は古くから有名・無名の訳者によって日本でも親しまれてきたが、新たに現代的感覚で30篇を訳出し、楽しいイラストレーションつきの日本人による日本人のためのマザー・グース絵本。

『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』 阿部謹也著 A 5 変形判230頁、1,800円 平凡社

「笛吹き」といえばマザー・グースの *Tom, he was a piper's son* など不思議な魔力のイメージがあるが、本書は1284年、ハーメルンの子供たち130人の失踪事件がグリムの童話に形成された過程の謎解きをタテ系に、中世ヨーロッパの都市と農村、子供十字軍、遍歴・被差別芸人などの問題をヨコ系に構成された興味深い歴史的・民俗学的エッセイ。

『バラッド研究序説』 原一郎著 A 5 判202頁、2,800円 南雲堂

バラッドの解説・紹介から英國ロマン派、現代詩への

影響、『古事記』、『諺曲』、『詩經』との比較研究、文献案内を含む本格的なバラッド研究への招待。

『ブルーグラス音楽——草の根のアメリカ白人音楽』 三井徹著 A 5 判222頁、1,400円 ブロンズ社

アメリカ南部山岳地方の民俗音楽から発展したブルーグラス音楽を、その特性、歴史、ミュージシャン各論、レコード案内等包括的に解説。

『ポップ・ソングの英語——プレスリーからビートルズまで』 高山宏之著 B 6 判191頁、980円 研究社

米英の、そして日本の若者に愛好されているpop hits 30曲に訳と解説と注釈をつけたポップ・ソングをよりよく理解するための人門書。

『ザ・ビートルズ イン イエロー・サブマリン』 高山宏之注釈 B 6 判141頁、950円 研究社

映画「イエロー・サブマリン」の原作をもとに、愉快なイラストをふんだんに使った視覚的な英語テキストで、楽しく読めるようにスラングや洒落には適切な注釈がつけられている。

『女性のアメリカ生活英会話』 脇山怜著 B 6 判223頁、800円 ジャパン タイムズ

アパート探しから子供の幼稚園への入園手続き、病気、出産など、従来の英会話書に不足していくしかもアメリカでの生活に欠かせない会話を扱っている。例文、解説ともに "American way of life" の一端をうかがわせ、その意味でも興味深い読物といえる。

『電話英語の聞き方話し方』 トミー植松著 B 6 判187頁、800円 ジャパン タイムズ

電話英語の要領と実際から便利な電話の使い方、国際電話まで電話と英語の実用的なハンドブック。

『英語の発音がうまくなる』 村田聖明著 B 6 判99頁、700円 ジャパン タイムズ

英語の基礎として発音が重要なのはいうまでもないが、入門期から発音記号を教える事を主張する著者の、初学者のためのジョーンズ式発音記号による発音指導。

『世界の放送——B C L のすべて』 ニッポン放送編 B 6 判238頁、840円 国際コミュニケーションズ

世界の放送の受信案内からラジオ設備までを詳説。

『翻訳を学ぶ』 別宮貞徳著 B 6 判247頁、1,400円 八潮出版社

翻訳指導に精通した著者の実際的な翻訳教則本。

『日本人の翻訳プロセス』 藤井章雄著 四六判176頁、1,500円 早稲田大学出版部

『英語教育年鑑 1975年度版』 語学教育研究所編 A 5 判237頁、2,500円 開拓社

英語教育界の動向／英語教員アンケート／研究業績

CROSSWORD PUZZLE

By C.V. Harrington



ACROSS

1. Conjunction
4. Social insect
6. Mineral spring
9. Reef substance
11. Traveler's resting place
13. Journey
14. Upper house of US Congress
15. Opposite of ALWAYS
17. Question (someone)
19. They ____ happy.
20. Money for work
23. Opposite of STOP

24. Try to ____ good.
25. Smallest number
27. Tear apart
29. Obtain
30. Stage performer
32. European country
35. Electrical unit
38. Walkway in theater
39. Opposite of OUTER
40. One of five on your foot
41. Opposite of STAND
42. 24 hours

DOWN

1. Perform

2. Friend of NEITHER
3. Swallow water
4. Albert's nickname
5. Opposite of HERE
6. You need one to post a letter
7. Dog or cat
8. A drink like beer
10. Gorilla
12. Opposite of OFF
14. I bought gas at a _____ station.
16. Abbreviation for VIRGINIA
17. I saw him two days _____.
18. Father's boy
21. Nickname for Pres. Lincoln
22. Still
26. Rub out chalk marks
27. Running contests
28. Abbr. for PHYSICAL TRAINING
29. A kind of piano
31. Possess
32. Opposite of THIN
33. _____ de Janeiro
34. Abbr. for NATIONAL LEAGUE
36. Asian drink
37. Attempt
39. What time is _____?

*The solution to this puzzle
may be found on page 43.*

◇米国 USIA 発行の英語教育専門誌

ENGLISH TEACHING FORUM

1975 Special Issue: THE ART OF TESOL

Part 1

Three Approaches: Traditional Grammar, Descriptive Linguistics, Generative Grammar/Techniques for Teaching/Teaching for Communication

Part 2

Teaching Reading and Writing/Audio-Visual Aids/Testing/Games and Songs/Evaluating Test-books/Scientific English

本書の年間購読料は ¥1,200 (含送料) になっておりますので、購読希望者は直接ELEC出版部にお申し込み下さい。

—バックナンバー—

英語展望

No. 50 ¥ 480

[特集] 英語教育の現状と改革の方向 (3)

対談: 英語教育への直言……平泉 渉・鈴木孝夫

日本の英語教育……………海江田 進

アンケート: 英語教育改善のために (2)

インタビュー: 永井道雄×聞き手 國弘正雄



展望 通信

◆第11回 ELEC 英語教育研究大会

期日 11月1日（土）

場所 ELEC 会館（東京都千代田区神田神保町3-8）

日程

10:00-10:10 開会の辞

10:10-11:00 講演 "To Commuincate in English" 国際基督教大学準教授 Dr. John C. Condon

11:10-12:00 講演 「Standard Japanese English の提唱」筑波大学教授 比嘉正範氏

12:00-12:30 ELEC 同友会総会

1:30-2:20 実演授業 東京都立第二商業高等学校教諭 名和雄次郎氏および同校第二学年生諸君

2:30-3:00 実演授業に関する質疑

3:10-4:40 分科会 (a)中学校部会 (b)高等学校部会

4:50-6:00 懇親会

◆語学教育研究大会

期日 10月18日（土）・19日（日）

場所 東京学芸大学

日程

▶18日（9:30 開会）

10:00 パーマー賞、市河賞贈呈式

11:00-12:00 講演「私の受けた語学教育を省みて」渡部昇一氏（上智大学）

1:00-1:40 講演「(音楽教育の面から見た英語教育：仮題)」藤井典明氏（東京学芸大学）

2:00-4:00 ヴィデオテープによる授業実演

中学の部：宇都宮市立一条中学校 原 稔氏
高校の部：東京学芸大学付属高等学校英語科教員一同

▶19日

10:00-12:00 協議会

<第一部会>「小学校における英語教育の条件」柴崎昭弥氏（千葉県指導部）<第二部会>「中学での指導手順は今今までよいか」若林俊輔氏（東京学芸大学）・佐藤秀志氏（奈良教育大学）

<第三部会>「教育機器と教育工学的手法」宇佐美昇三氏（NHK）・落合二郎氏（府中高等学校）
<第四部会>「高校リーダーの扱い方」伊部 哲氏（新宿高等学校）・伊村元道氏（玉川大学）<第五部会>「高校英語のカリキュラム」有馬敏行氏（戸山高等学校）・緒方勲氏（白百合女子大学）・西村幸三氏（三田高等学校）

1:00-1:50 講演 Mr. E. A. Richter（東京学芸大学）

2:00-3:30 パネル・ディスカッション「どんな英語を教えるか」中尾清秋氏（早稲田大学）・上田明子氏（津田塾大学），司会：村田勇三郎氏（立教大学）

◆ELEC 同友会月例研究会

ELEC 会館を会場として、つぎの通り月例研究会が開催される。入場無料。

第80回 9月27日（土）2:30-4:30

講演「Washington D. C. の日本人達——その英語教育から見た文化的衝突——」

慶應大学助教授 小池生夫氏

第81回 「Teaching Procedure の考え方」

東京学芸大学助教授 若林俊輔氏

◆「言語と文化」シンポジアム

横浜YMCA（横浜市中区常盤町1-7）では、午後6時～8時（11月11日のみ1時～4時）の時間に下記の通りシンポジアムを開く。入場無料。

10月21日 「言語と国際理解」國弘正雄氏

10月29日 「朝鮮人作家として」金石範氏

11月6日 「平泉試案を問う」中尾清秋氏

11月11日 「今日の英語教育を考える」中津燎子氏

◆デルファイ会

国際感覚豊かな日本人中堅各分野専門家を中心とした研究グループが発足、毎月外国人有識者を交えて学際的討論会を開いている。時事英語を縦横に駆使して日本の国際化に関する諸問題を検討し合い、または各種プロジェクトを企画遂行して、日本に対する世界の良識を形成せんとする知的グループ。

趣意書、会員資格等、問い合わせは、100 東京都千代田区有楽町1-8-1 三菱総合研究所内 永田 清（電話 03-214-1331）まで。

◆TOEFL 模擬試験

TOEFL 受験者のための模擬試験が11月7日（金）午後1時から ELEC 会館で実施される。受験希望者はELEC 「TOEFL模擬試験」係宛願書を請求されたい。

◆中学生のための英語特別講座

「英語のきらいな中学生」「英語のにがてな中学生」を

対象に、英語を好きにさせることを目的とした「中学生のための英語特別講座」(ELEC 主催)が8月18日から22日までの5日間、ELEC会館を会場にして開催された。30校から100名の中学生が参加し、英語を学ぶ楽しさを肌をもって体験することができた有意義な講習会であった。

講座の内容は、英会話(7時限)、講義(4時限)、Singing(2時限)、言葉遊びゲーム(2時限)、ピクニック(半日)で、教授陣には國弘正雄(国際商科大学教授)、Thomas Clark(ELEC 英語研修所専任講師)、下村勇三郎(東京学芸大学付属竹早中学校教諭)の諸氏を中心に8名が当たった。



外国人を交じてのピクニック

プログラムの中で特に好評であったのは外国人を交じてのピクニックで、英語の学習を始めてまだ間もない中学生達が、生き生きとして英語での対話を楽しんでいた。

ELECとしては、「中学生のための英語講座」は初の試みであったが、極めて好評裡に閉幕したため、今後もこの種の講座を夏期ばかりではなく冬期にも実施する予定である。

◆ELEC 海外英語研修

ELEC、ミシガン州立大学英語研修センター、日本交通公社の共催で行なわれた第4回ミシガン州立大学英語研修旅行は期間1カ月(7月28日—8月26日)、参加者39名、ミシガン州立大学のEnglish Language Centerで、周倒に用意されたプログラムにより20日間の充実した英語研修に従事、その間Greenfield Village、Dutch Village見学、Home Visit、Ionia Fair、デトロイトの野球見物など多彩な経験をしたのち、Niagara Falls、New York、Washington、Los Angeles、San Francisco、

Honoluluに1泊ないし2泊して1週間を米国各地の見学に費やし、参加者一同にとりきわめて有益な海外研修が実施された。

◆第6回阿波池田ジャンボーズクラブ主催四国夏期英語セミナー

8月16日正午から19日正午までの3泊4日にわたって開催された上記セミナーは、全国各地から150名に及ぶ参加者を得て好評裡に終了した。会場は徳島県三好郡池田町白地の郵政省簡易保険阿波池田保養センターで眺望絶佳の高台にあり好適の場所となっている。

講師は連続6回来講の國弘正雄教授(国際商科大:三木総理訪米に同行の体験談と国際情勢について)をはじめ、河上道生教授(愛知医大:語法と受験英語の誤りを指摘)、J. B. ハリス先生(旺文社:英語の表現について)、シグ藤田先生(A E N、「天声人語」翻訳者:スピーディーな翻訳)と豪華版、いずれも専門知識を生かした講義は圧巻であった。

外人講師は10名、参加者は中学生、高校生、大学生、教師、一般社会人とバラエティーに富んでおり、それぞれ会話能力別に小グループ編成を実施した。3回以上の参加者がかなりいて雰囲気は和気あいあいである。特に私をひきつけたのは受講生の英語に対するひたむきな情熱であり、講師と受講生の暖かい心の交流であった。

発足以来7年、四国の辺境にあって、今まで6回を数えることができたのは、実に多くの人のご支援の賜物であり、この熱意にむくいるためにも、第7回は装いを新たに出なおしたいと思っている。

(阿波池田ジャンボーズクラブ幹事 生田晴康)

■『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限はありませんが未発表のものに限りません。掲載分には規定の原稿料を贈ります。

■本誌の年間予約購読をおすすめいたします。購読料は年額1,900円、送料は当出版部で負担いたします。

英語展望 (ELEC Bulletin) 第51号
定価 480円 (送料70円)

昭和50年10月1日 発行

©編集人 中島文雄
発行人 酒井杏之助
印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部 (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911~8916
振替・東京 3-11798

ELEC BULLETIN

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC